

丸の内町共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

高松城跡(丸の内地区)

2016年3月

有限会社 都市企画設計
高松市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、丸の内町共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、高松城跡（丸の内地区）の報告を収録した。
- 2 発掘調査地及び調査期間は次のとおりである。
調査地：高松市丸の内4番地3
発掘調査：平成27年3月2日～同年3月27日（実働22日）
整理作業：平成27年5月1日～平成28年1月31日
調査面積：約226m²
- 3 発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当し、その費用は建設事業者が全額を負担した。
- 4 現地調査は創造都市推進局文化財課非常勤嘱託職員 新井場 茗の補助を得て同課文化財専門員 波多野 篤が行つた。整理作業及び報告書の執筆・編集は波多野が行つた。
- 5 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたつて、香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財センターから御指導・御教示いただいた。記して厚く謝意を表する。
- 6 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第IV系（世界測地系）に従つた。また、方位は座標北を示す。
- 7 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SD：溝 SK：土坑 SP：柱穴 SE：井戸 SX：性格不明遺構
- 8 本書で使用している挿図の縮尺は、遺構実測図は1/40、遺物実測図は土器・土製品が1/3、金属製品が1/2、瓦が1/4を原則としたが、一部を異なる縮尺としており、各図に縮尺を明示した。
- 9 遺物の年代観については下記の文献を参考にした。
 - ・佐藤 竜馬 2003「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 第4冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会
 - ・佐藤 竜馬 2003「出土瓦の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 第4冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会
 - ・松本和彦 2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告第5冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員会
- 10 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過（調査日誌抄）	1
第3節 整理作業の経過	2

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 調査地周辺の地形と層序	3
第2節 高松城周辺の歴史的環境	5

第3章 調査成果

第1節 試掘調査の概要	8
第2節 発掘調査の成果	9

第4章 総括

第1節 検出遺構と出土遺物について	46
第2節 絵図と調査成果の比較	47

挿図目次

図1 事業地位置図	1	図21 第1遺構面 溝 平面図・断面図 (1/60・1/40)	30
図2 調査地位置図	3	図22 第1遺構面 溝 出土遺物 (1) (土器1/3)	31
図3 調査地周辺の層序	4	図23 第1遺構面 溝 出土遺物 (2) (土器1/3, 瓦1/4)	32
図4 周辺の遺跡	5	図24 第1遺構面 ピット 平面図・断面図 (1/40)	33
図5 調査区東壁断面図 (1/40)	10	図25 第1遺構面 ピット 出土遺物 (土器1/3)	33
図6 整地層 (III・IV層) 出土遺物 (土器1/3, 金屬製品1/2)	11	図26 第2遺構面 平面図 (1/100)	34
図7 第1遺構面 平面図 (1/100)	12	図27 第2遺構面 土坑・井戸 平面図・断面図 (1/40)	35
図8 第1遺構面 土坑 平面図・断面図 (1) (1/40)	14	図28 第2遺構面 土坑 出土遺物 (土器1/3, 瓦1/4)	36
図9 第1遺構面 土坑 出土遺物 (1) (土器・土製品1/3, 瓦1/4, 金屬製品1/2)	15	図29 第2遺構面 井戸 出土遺物 (土器1/3)	37
図10 第1遺構面 土坑 出土遺物 (2) (土器1/3, 瓦1/4)	17	図30 第2遺構面 SD201 平面図・断面図 (1/60・1/40)	38
図11 第1遺構面 土坑 出土遺物 (3) (土器・土製品1/3, 瓦1/4)	18	図31 第2遺構面 SD242 平面図・断面図・立面図 (1/40・1/20)	39
図12 第1遺構面 土坑 出土遺物 (4) (土器1/3)	19	図32 第2遺構面 溝 出土遺物 (土器1/3)	40
図13 第1遺構面 土坑 出土遺物 (5) (土器1/3, 瓦1/4)	20	図33 第2遺構面 ピット 平面図・断面図 (1/40)	41
図14 第1遺構面 土坑 出土遺物 (6) (土器1/3・1/8, 瓦1/4)	21	図34 第2遺構面 ピット 出土遺物 (土器1/3, 瓦1/4)	42
図15 第1遺構面 土坑 平面図・断面図 (2) (1/40)	22	図35 第3遺構面 平面図 (1/100)	43
図16 第1遺構面 土坑 平面図・断面図 (3), 井戸 平面図・断面図 (1/40)	24	図36 第3遺構面 井戸・ピット 平面図・断面図 (1/40)	44
図17 第1遺構面 土坑 出土遺物 (7) (土器1/3)	24	図37 第3遺構面 井戸 出土遺物 (土器1/3・1/8)	45
図18 第1遺構面 井戸 出土遺物 (土器1/3, 瓦1/4)	26	図38 遺構変遷図 (1/300)	46
図19 第1遺構面 性格不明遺構 平面図・断面図 (1/40)	27	図39 講岐高松城(岡倉永一十七年生駒家封地没収)	
図20 第1遺構面 性格不明遺構 出土遺物 (土器1/3・1/8, 瓦1/4, 金屬製品1/2)	28	大洲藩主加藤泰興治当時 (高松市歴史資料館蔵)	47

挿表目次

表1 土器・土製品観察表 (1) ~ (5)	52~56	表3 金屬製品観察表	58
表2 瓦観察表	57		

本文写真目次

写真1 重構削削の様子 (南東から)	2	写真5 試掘調査の様子 (北西から)	8
写真2 遺構削削の様子 (北東から)	2	写真6 試掘調査の様子 (東から)	8
写真3 遺構削削の様子 (南西から)	2	写真7 SD242 調査風景 (南西から)	59
写真4 試掘調査の様子 (北から)	8		

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

高松市丸の内の史跡高松城跡隣接地で共同住宅建設工事が計画され、平成26年12月12日付けて事業者から高松市教育委員会に対して事業地の試掘調査の依頼が提出された。本市教育委員会は、提出された依頼に基づき、平成27年2月3・4日の実働2日で試掘調査を実施した。試掘調査の結果、今回の事業地には複数の遺構面が存在し、かつ遺構・遺物が認められることが判明した。試掘調査の結果を受けて、事業地全域は周知の埋蔵文化財保蔵地「高松城跡（丸の内地区）」に追加登録された。

その後、事業者と本市教育委員会は工事の計画について複数回の協議を重ねたが、工事の計画変更は困難であるという結論に至った。同年2月4日付けで事業者から埋蔵文化財発掘の届出が本市教育委員会に提出された。その届出を本市教育委員会から香川県教育委員会に進達したところ、同年2月10日付け、26教文第138-57号で香川県教育委員会より、工事着工前に発掘調査を実施する旨の指導があった。

その後、発掘調査の実施に向けて事業者等と本市教育委員会は協議を重ね、費用面などの合意が形成されたため、同年2月19日付けで事業者の代理となった有限会社都市企画設計、業務を管理する高松市、業務を監督する高松市教育委員会の三者で協定を締結し、「丸の内町共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」として、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなつた。

発掘調査の対象となったのは建物が建設される範囲で、調査面積は約226m²、調査期間は平成27年3月2日～27日までの実働22日である（図1）。発掘調査によって、近世の遺構面を合計3面確認し、各遺構面から多数の遺構・遺物が出土した。

第2節 調査の経過（調査日誌抄）（写真1～3）

平成27年3月2日から発掘調査を開始した。掘削廃土を場外に搬出することができなかつたため、建物の建設予定地を4分割し、発掘と埋戻しを繰り返して調査を行つた。最後の調査区の調査が完了したのが3月27日で、同日中に調査道具等の撤収を行い、この日をもつて現地での作業を全て終えた。詳細な調査経過については、下記の調査日誌抄を参照願いたい。

調査日誌抄（平成27年3月2日～同年3月27日）

- 3月2日（月） 調査道具・重機の搬入。安全フェンスを設置したのち、事業地東側において第1遺構面までの重機掘削を行つた。
- 3月3日（火） 東側調査区の第1遺構面の遺構検出作業を行つた。降雨のため、昼過ぎで作業を中止した。
- 3月4日（水） 遺構掘削作業を開始した。
- 3月7日（土） 東側調査区の第1遺構面を完掘し、全景写真的撮影を行つた。
- 3月8日（日） 遺構の補足調査を実施した。本日で、東側調査区の第1遺構面の調査が完了した。
- 3月10日（火） 東側調査区の第2遺構面までの重機掘削を行つた。引き継ぎ、遺構検出・掘削作業を行つた。
- 3月11日（水） 第2遺構面の遺構掘削を継続した。本日で遺構を完掘し、全景写真的撮影を行つた。



図1 事業地位図

- 3月13日（金） 東側調査区の第3遺構面までの重機掘削を行った。その後、遺構検出作業を行ったが、遺構は認められなかった。全景写真の撮影・図面作成を行い、東側調査区の調査が完了した。重機で、東側調査区を埋戻した。その後、南西側調査区の第1遺構面までの重機掘削を行った。
- 3月14日（土） 昨日に引き続き、南西側調査区の重機掘削を行った。終了後、北東側調査区の重機掘削を行った。重機掘削が先に完了した南西側調査区から、順次、遺構検出作業を行った。
- 3月16日（月） 南西側調査区の遺構掘削を行った。遺構が完掘できため、全景写真の撮影と図面作成を行った。
- 3月17日（火） 北東側調査区の第1遺構面の遺構掘削を行った。遺構が完掘できため、全景写真の撮影と図面作成を行った。
- 3月20日（金） 北東側・南西側調査区の第2遺構面までの重機掘削を行った。その後、遺構検出作業を行い、北東側調査区は第2遺構面の遺構を完掘した。北東側調査区のみ、全景写真の撮影を行った。
- 3月21日（土） 南西側調査区の第2遺構面の遺構掘削を行った。遺構を完掘できため、全景写真の撮影を行った。その後、図面作成を行った。
- 3月22日（日） 南西・北東側調査区の第3遺構面までの重機掘削を行った。引き続き遺構検出を行い、南西側調査区のみ遺構検出を行った。北東側調査区は写真撮影と記録作成が完了したため、重機で埋戻しを行った。その後、北西側調査区の第1遺構面までの重機掘削及び遺構検出作業を行った。
- 3月23日（月） 南西側調査区の第3遺構面の遺構の調査を行った。遺構の掘削が完了したため、全景写真の撮影と図面作成を行った。併行して、北西側調査区の第1遺構面の遺構掘削を行い、遺構を完掘した。全景写真の撮影と図面作成を行い、第1遺構面の調査が完了した。
- 3月24日（火） 南西側調査区を重機で埋戻した。北西側調査区の第2遺構面までの重機掘削を行った。その後、遺構検出及び掘削を行った。
- 3月26日（木） 北西側調査区の第3遺構面までの重機掘削及び遺構検出と掘削を行った。遺構の完掘後、全景写真の撮影を行った。
- 3月27日（金） 北西側調査区の第3遺構面の補足調査を行った。その後、重機で北西側調査区の埋戻しを行った。安全フェンスの撤去と調査道具の搬出を行い、本日で現地での全ての作業が完了した。



写真1 重機掘削の様子 (南東から)



写真2 遺構掘削の様子 (北東から)



写真3 遺構掘削の様子 (南西から)

第3節 整理作業の経過

現地調査終了後、平成27年5月から図面・写真・遺物の整理作業を開始し、遺物実測、図面製図作業などを順次行った。12月から原稿執筆と報告書の編集作業を進め、1月にその作業が概ね完了した。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 調査地周辺の地形と層序

(1) 高松市の地形

高松市は香川県のほぼ中央に位置する県都で(図2)、平成17年9月及び平成18年1月に近隣の庵治町、牟礼町、塩江町、香川町、香南町、国分寺町の6町と合併した。その結果、市域の面積も合併前の約1.9倍にあたる約375km²に拡大した。加えて、人口も約42万人に増加しており、高松市がこれまで以上に四国における中核的な都市として重要な役割を担うことになった。

現在の高松市における主要な居住区域となっているのが高松平野と呼ばれる平野部で、地形分類では讃岐山脈を源とする複数の河川によって形成された沖積地と位置付けられている。高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川という主に六つの河川が北流して瀬戸内海へと流れ込む。このうち、香東川は現在の春日川よりも西の沖積平野を形成したと考えられており、高松平野の地形形成過程を考える場合に欠くことのできない河川と位置付けられる。なお、香東川は、現在は石清尾山塊の西を北流しているが、近世初期までは高松市香川町大野付近で東西に分流していたと考えられている。香東川の東側の流れは、高松城下付近を通過し、現在の御坊川筋を流下していたと考えられているが、流路の氾濫を防ぐことと新田開発を目的として、1630年代に伊勢藤堂高虎の家臣である西嶋八兵衛が主導して東側の流れをせき止め、支流であった西側の流れに一本化する工事が行われたことが伝えられている。

さて、今回調査を行った高松市丸の内は、官公庁など主要な施設が建ち並ぶ市の中心部からわずかな距離にあり、かつ四国の玄関口となる高松駅にほど近い場所にある。当地はビルが隣立するため、近世以前の旧地形を想定することは容易ではない。そのような状況にあるが、これまでの研究によって丸の内の南側に位置する鍛冶屋町や丸亀町付近の地形が、周辺よりもやや高く、なおかつその東・西側は低くなることが明らかとなっている¹⁾。さらに、調査地付近の南北の標高を見ると、地形面の南からの傾斜が丸亀町付近で緩やかとなり、生駒時代の城下町南限付近で急な傾斜となった上で、北へ平坦な地形面が連続する状況を確認できる。本調査地は、微細な地形面上に立地する地点と言える。

(2) 調査地周辺の地質

高松平野の大半が香東川のもたらした堆積物によって形成されたことは前述したとおりである。高松平野の地質は、古くは高橋学氏が詳細に分析しているが²⁾、近年では高橋氏の研究を基

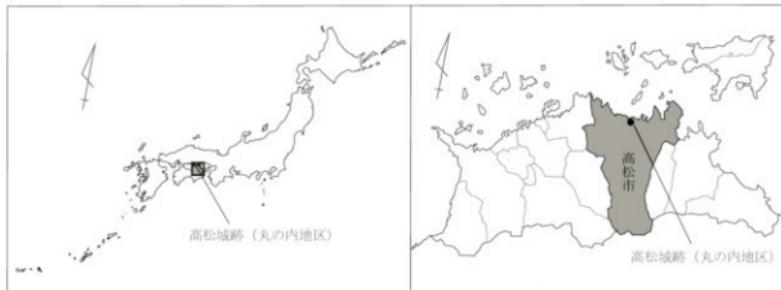
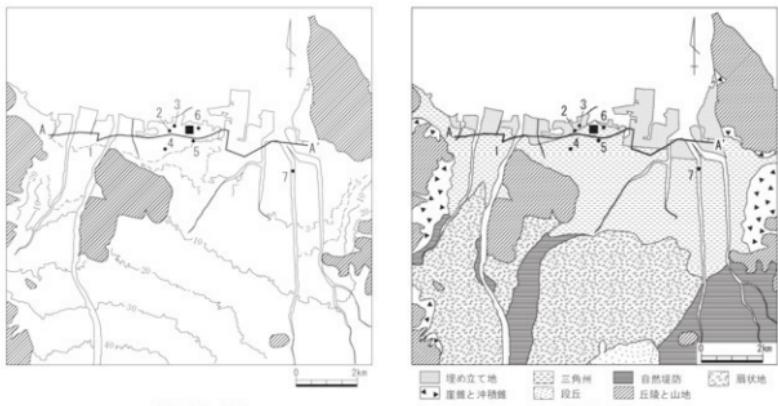


図2 調査地位置図

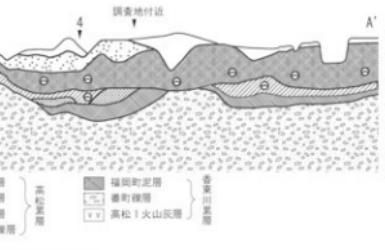


a. 高松平野の地形

■は調査地を示す。

b. 地形分類図

■は調査地を示す。



c. 地質断面図

図3 調査地周辺の層序

a～cの図は、川村(2000)のデータを加筆・修正して使用した。

礎として川村教一氏が分析を行っている³⁾。ここでは、川村氏の分析に従って、調査地周辺の地質について概観する。

高松平野の地下地質は、下位から基盤岩、讃岐層群、三豊層群、洪積層、沖積層の順に累重しており、平野部の表層地質は中部更新統～完新統で構成される（図3）。川村氏は、高松平野臨海中部の中部更新統～完新統を2累層（香東川累層・高松累層）、6部層（下位から番町疊層・福岡町泥層・浜ノ町砂疊層・西内町泥層・西内町砂層・西内町疊層）に分類し、香東川累層を下位、高松累層を上位と位置付けている。この分類によれば、調査地の表層部は、高松累層のうち「西内町疊層」であることが推定できる。西内町疊層は、西内町砂層の上に整合、若しくは不整合に重なる茶灰色疊混じり砂～疊層で、香東川と旧香東川水系で発達している。西内町疊層の層厚は0～8 mで、高松市番町付近では本層下部に弥生時代後期～古墳時代の土器片を含む。西内町疊層の形成時期は、臨海中部では縄文時代後期以降と考えられ、主に河川の洪水氾濫堆積物と考えられる。なお、高松累層の岩相の垂直変化は、上位の堆積にむけて粒度が粗粒化していることから、3部層の堆積の間に水深が浅化する傾向が読み取れるという。

本調査では、標高-0.6 m程度まで掘削し層相を観察した。川村氏が示す断面図に従えば、本調査地で確認した基本層序のV層は、西内町疊層にあたると考えられる。標高-0.6 mよりも下位の堆積状況の対比はできなかったが、いずれにしても、今後、周辺地で発掘調査が行われる場



図4 周辺の遺跡

合は、当地の地形形成過程を詳細に捉えるために、基礎となる川村氏の大別層序との比較を行うことが必要となってくるだろう。

第2節 高松城周辺の歴史的環境

(1) 近世における高松城周辺の遺跡

高松城周辺の発掘調査の事例は極端に多くはないが、近年、調査成果が蓄積され、特に中世以降の土地利用の状況が明らかになってきた（図4）。これまでに実施された高松城周辺での発掘調査では主に11世紀後半以降の遺構が検出されていることから、当地は少なくとも中世前半には安定した地形面が形成されていたようだ。発掘調査の成果で特に注目されるのは、高松城跡（西の丸町地区）で検出された中世前半の港湾関連施設であり⁴⁾、出土遺物の様相から、当該期に当地は他地域と活発に交流していたことが推定されている。このほか、13世紀末～15世紀末にかけての集落が検出された浜ノ町遺跡など⁵⁾、中世には一定規模の施設や集落が形成されていたことが明らかになっている。

近世の発掘調査成果としては、外曲輪での調査事例が増加している。『高松市街古図』に描かれた位置で門を検出した松平大膳家上屋敷跡の調査⁶⁾や、生駒家の家紋が刻まれた石材で造られ

た遺構を検出した高松城跡（既跡）の調査⁹⁾など、絵図などの記録と整合的に理解できる調査事例が増加している。なお、松平大膳家上屋敷跡の調査では、18世紀前葉～19世紀前葉にかけての上水施設が検出されており、屋敷地における上水施設の状況の一端を知る上で重要な成果と言える。これ以外では、現在、香川県立ミュージアムが位置する高松城跡（東ノ丸）における発掘調査で、時期などの詳細は不明だが上水施設が検出されているし¹⁰⁾、同様に現在のアルファあなぶきホールがある東ノ丸の調査で、地下3mの深さから木樋などが70mにわたって検出されている¹¹⁾。

一方、城下町における調査成果は極めて少なく、ふいご羽口や鉄滓が出土した紺屋町遺跡の調査事例が、城下町における数少ない情報であった¹²⁾。しかし、近年、調査例も増加し、紺屋町遺跡以降に調査された高松城跡の南西側に位置する二番丁小学校遺跡では、近世の区画施設・建物遺構・廃棄土坑などが検出されている¹³⁾。さらに、丸亀町では、近世の上水施設である亀井戸跡が調査された¹⁴⁾。平成26年度には調査地の南東側すぐの箇所で発掘調査が行われ、近世の3つの遺構面で調査が行われている¹⁵⁾。この調査では、近世の整地層の作業工程の復元が行われており、近世段階での高松城下における土地造成の一端を窺い知ることができる貴重な調査例と言える。

（2）高松城と城下町について

高松城及び高松の城下町を形成したのが、豊臣秀吉の家臣であった生駒親正である。豊臣秀吉の四国出兵後の天正15（1587）年、生駒親正是讃岐国17万石を領することとなる。その後、親正の居城として、天正16（1588）年から数ヵ年をかけて築かれたのが高松城である。寛永17（1640）年には御家騒動により生駒氏は出羽国矢島に転封となり、代わって寛永19（1642）年に松平頼重が高松に移り、東讃岐12万石の領主となる。

以後、松平氏は高松城の改修をたびたび行っており、特に寛文11（1671）年に東ノ丸・北ノ丸の大規模な造成を行い、良櫓・月見櫓・渡櫓・水手御門の建築を行った。とりわけ、頼重は城下町の整備にも早々に着手しており、城下町に上水道を敷設したと伝えられ、城下町の基盤整備に重点を置いていたことが推定される。高松城は、内堀・中堀・外堀の三重の堀をめぐらし、その内部に本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配する構造である。さらに、本丸は堀によって他の曲輪から独立しており、本丸と二ノ丸をつなぐ鞘橋を落とせば敵の進入を防護できる仕組みになっている。のことから、本丸は防御重視の形態と言える。

さて、頼重によって基盤整備が進められた高松城下であるが、その変遷についての研究は後世に残された絵図や文献などから進められている。ここでは、その先駆的な研究成果のひとつである森下氏の成果¹⁶⁾をもとに、城下町の変遷を概観する。

生駒時代の寛永4（1627）年頃の城下は、高松城の西側・東側・南側に広がり、東西9～10町（約1km）、南北6町（約650m）程度の広さであった。城下町の東西には干渉、南側には深田が広がっており、外堀内には侍屋敷、外堀の南側には丸亀町・兵庫かたはら町・古新町・ときや町・こうや町・かちや町・かたはら町・百間町・大工町などの町屋が存在した。この時期の侍屋敷は、これら町屋を囲うようにコの字に配置されていた。なお、城下町には800～900軒の家の建ち並んでいたと考えられている。生駒時代の城下町の南限は明確ではなく、少なくとも三番丁付近までは城下町と考えられている。

松平入封後の17世紀中頃から18世紀初頭、すなわち初代藩主松平頼重と二代目頼常の治世に城下町の整備が進められ、この時期に城下町の基本構造がほぼ完成したと見られる。城下町の規模については、生駒時代と比較して相当に拡大したことが絵図などから読み取れる。具体的には、城下町の東西は、西は摺鉢谷川、東は仙場川まで拡大した。一方、城下町の南西部は侍屋敷が配

置され、城下町の南は九番丁まで拡大した。なお、享保年間には御家人が減少した影響で、城下町の南東部にあった侍屋敷や馬場がなくなり、これに代わって町屋が形成されたため、外堀の南東側は町屋が多数を占め、侍屋敷は城下町の南西部に配置された。城下町の変遷に連動して、城下町の人口も急激に増加している。木原氏の整理によれば、家臣以外の人口として、寛永19(1642)年が12967人、慶安4(1651)年が15903人、寛文7(1667)年が19726人となっており、およそ25年で7000人弱の人口が増加したと考えられている¹⁵⁾。

註・引用文献

- 1) 板口良昭 1990『第3節 城下町高松と周辺の変貌』『高松百年史』高松市
- 2) 高橋学 1987『高松平野の地形環境分析Ⅰ』『高松市太田地区周辺道路詳細分布概報』高松市教育委員会
- 3) 川村教一 2000『香川県高松平野における沖積層の層序と堆積環境』『第四紀研究 Vol.39』日本第四紀学会
- 4) 佐藤竜馬 2003『サンボート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（西の丸町D地区）』香川県教育委員会
松本和彦ほか2003『サンボート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 5) 乗松真也 2004『サンボート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 浜ノ町遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 6) 小川賢 2004『新ヨンデンビル別館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）』高松市教育委員会
- 7) 小川賢 2006『高松丸亀町商店街A街区第一種市街地再開発事業に係る隔地駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（既勢跡）』高松市教育委員会
- 8) 北山健一郎 1999『高松城跡 香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター
- 9) 香川県教育委員会（編）1987『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』香川県教育委員会
- 10) 末光甲正 2003『紺屋町遺跡』高松市教育委員会
- 11) 渡邊誠・船篠紀子 2011『新設統合第二小学校建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 二番丁小学校跡』高松市教育委員会
- 12) 波多野篤 2012『高松丸亀町商店街G街区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 亀井戸跡 - 高松城下における上水施設の調査』高松市教育委員会
- 13) 池見渉（編）2015『丸之内共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡（丸の内地区）』高松市教育委員会
- 14) 森下友一 1996『高松城下の歴史と城下の変遷』『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要IV』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 15) 木原博幸 2003『地域に見る讀みの近世』株式会社 美巧社

第3章 調査成果

第1節 試掘調査の概要

(1) 試掘調査の方法

試掘調査以前、当地は周知の埋蔵文化財包蔵地に該当していなかったが、事業の実施にあたって、事業者の任意の協力により試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、遺構・遺物の有無を確認することと、遺構が認められた場合にどのように分布するのかを把握することを主な目的として実施した。試掘調査は、事業対象地全域に合計3本のトレチを設定して行い、調査面積は約47m²である（写真4～6）。調査は、重機を用いて後述する発掘調査の第1遺構面まで掘削を行い、人力で遺構面の精査と遺構検出・掘削作業を行った。また、第1遺構面で遺構が認められない箇所で、下位の遺構面の遺構確認を部分的に行つた。

(2) 調査成果の概要

試掘調査の詳細は、平成27年度末に刊行した高松市教育委員会編『高松市内遺跡発掘調査概報－平成27年度国庫補助事業－』に掲載しておりますからを参照願いたい。試掘調査の要点は、以下の3点である。

- 1) 事業対象地の全域で近世後半と考えられる遺構面を2面確認し、それぞれで遺構・遺物を検出した。
 - 2) 上記2面の遺構面の下位に、比較的安定した地形面を確認した。上位の遺構面の保護のため遺構確認を行った面積はわずかで、遺構は検出していない。しかし、周辺の調査成果を考慮すると、その地形面で遺構が存在する可能性があると考えられる。
 - 3) 試掘調査で確認した遺構は近世の遺構のみだが、当地は近世の絵図等で「御用屋敷」などと記載された場所にあたり、調査成果と合わせて検討することで、高松城下に関わる重要な知見を得ることができると考えられる。
- 以上の所見から、試掘調査後に事業地全域は周知の埋蔵文化財包蔵地「高松城跡（丸の内地区）」に追加登録された。そのため、本工事の実施にあたっては、埋蔵文化財に対する適切な保護措置を図る必要が生じた。



写真4 試掘調査の様子（北から）



写真5 試掘調査の様子（北西から）



写真6 試掘調査の様子（東から）

第2節 発掘調査の成果

(1) 調査の方法

a 調査区の設定・掘削

発掘調査は、工事の掘削によって埋蔵文化財が破壊される範囲のみで実施した。今回の工事で地下の文化財に影響を与えるのは、建物本体の建設箇所である。今回の調査は、敷地面積が 200 m²未満ながら掘削土量が相当量見込まれること、さらに掘削廃土の場外搬出ができないことから、調査区を 4 分割して行った。調査時には、東側・北西側・南東側・南西側調査区と個別に呼称したが、本報告にあたっては、特別な理由がない限り個別の調査区名は用いない。

発掘調査は、まず事業対象地東側の第 1 ~ 3 遺構面までの調査から着手した。その調査が終了したのに、そのまま東側調査区の埋戻しを行った。引き続き、南西側・北東側調査区の調査に移行した。北東側調査区の調査が先に終了したため、その地区を埋戻したのち、北西側調査区の重機掘削と調査を行った。最終的に、南西側・北西側調査区の遺構掘削が完了したのち、双方の調査区を埋戻し、調査を終えた。

掘削等の具体的な方法は、各遺構面までの堆積土は重機を用いて掘削し、遺構検出・掘削は全て人力で行った。

b 遺構番号・遺物の取り上げ・図化作業

調査で検出した遺構には、遺構の性格に関係なく、第 1 遺構面の遺構に 1 からの番号、第 2 遺構面の遺構に 201 からの番号、第 3 遺構面の遺構に 301 からの番号を与えた。ただし、北東側調査区で、第 1 ・ 2 遺構面の遺構を同一面で検出し調査した。その遺構については、帰属する遺構面を検討した上で、整理段階で遺構番号を修正した。

遺物の取り上げは、各遺構から出土した遺物は遺構単位で取り上げ、出土層位が明確な遺物は出土層位まで記載した。

図化作業は、事業者側が世界測地系に従った 4 級相当の基準点 4 点を事業地内に新設し、その座標を用いて手測りで平面図を作成した。なお、水準測量は、同時期に事業地の北側で実施していた旧城内中学校解体工事に伴う埋蔵文化財調査で使用していた基準点の標高を、調査担当者が直接水準で事業地の基準杭に取り付けた。

(2) 基本層序（図 5・6、図版 1・10）

調査地は、狭小な調査範囲ではあるが、近世段階の複数回にわたる整地の痕跡が観察できた。ここでは、基本層序を土層を最も良好に観察できた調査区東壁断面を用いて説明する。

当地の層序は、堆積時期や土層の性格を考慮して、大別 5 層（I ~ V 層）にまとめることができる。I 層は現代造成土（層厚 10 ~ 25 cm）で、層中に多数の瓦礫が含まれることや、層の下面に焼土・炭化物などが大量に認められた。これらの所見から、第二次世界大戦後の造成に伴う土層と考えられる。II 層はぶい黄色細砂混じりシルトなどからなる土層（層厚 30 ~ 60 cm）である。II 層は近世・近代の遺物を含むことから、近代以降に形成された造成土と考えられる。III 層は暗灰黄色細砂混じりシルトなどからなる土層（層厚 10 ~ 40 cm）で、層中に炭化物・焼土などが含まれる。III 層には近世の遺物が含まれることから、近世の整地層と考えられる。事業地南東隅での III 層上面の標高値は約 1.1 m である。IV 層はオーリープ黄色シルト混じり細砂などからなる土層（層厚 30 ~ 50 cm）で、層中に炭化物・焼土などが含まれる。また、層中に粘土ブロック及び近世の遺物を含むことから、近世の整地層と考えられる。事業地南東隅における IV 層上面の標高値は約 0.7 m である。V 層は灰色シルト混じり細砂などからなる土層である。事業地南東隅における V 層上面の標高値は約 0.3 m である。調査地南東側で V 層上面から 80 cm の深さまで断割り調

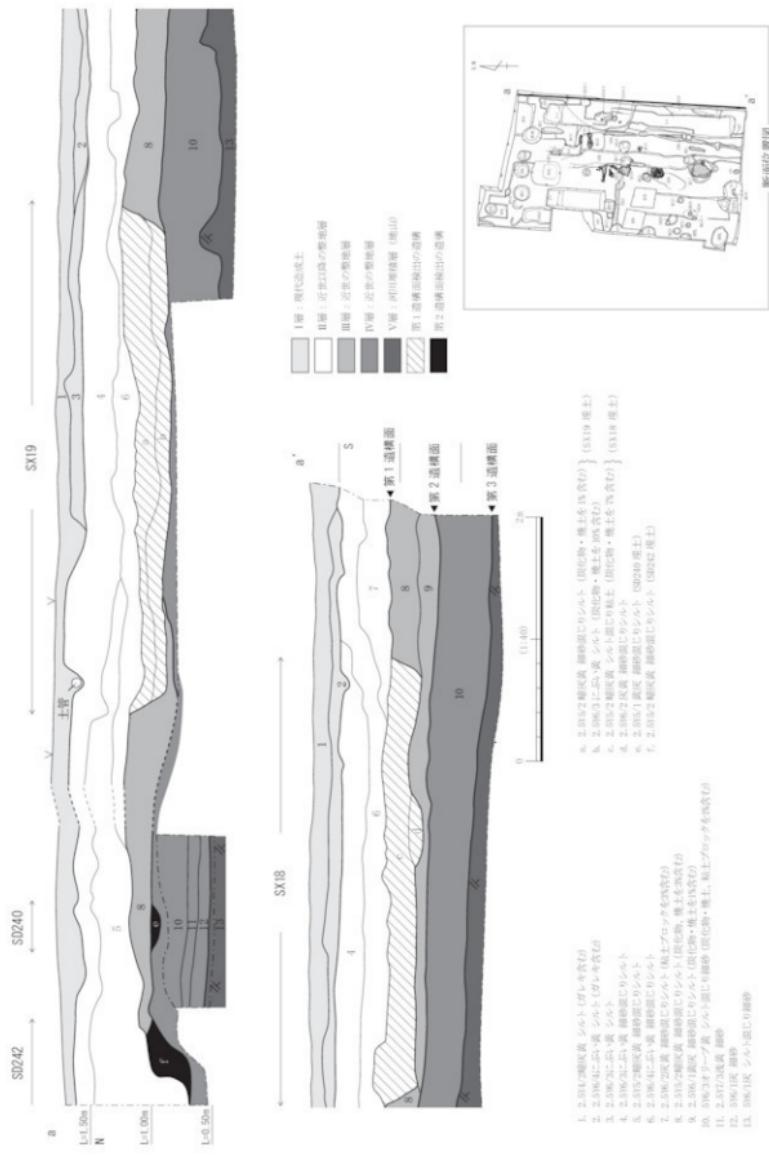


図5 調査区東壁断面図 (1/40)

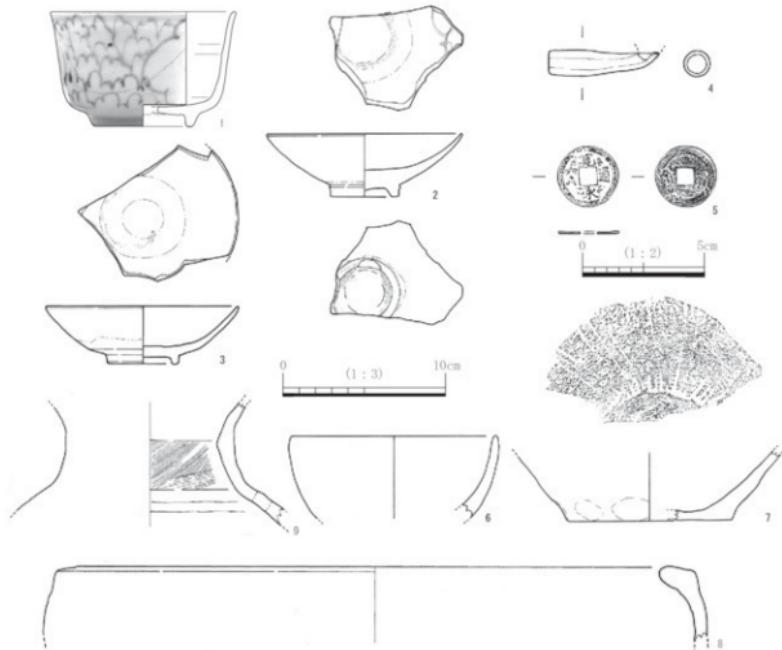


図6 整地層(III・IV層)出土遺物(土器1/3、金属製品1/2)

査を実施し、V層の層相等の観察を行った。その結果、V層は複数層に細分できるが、層相に大きな変化は見られず^a、掘削した範囲で層中に遺物・炭化物等は含まれないことを確認した。さらに、V層上面から80cm以下の深度で湧水が認められた。これらの所見から、V層は河川堆積由来する自然堆積層(地山)と考えられる。なお、V層の下位に遺構面は認められなかった。

以上の大別層序のうち、発掘調査ではIII・IV・V層上面で近世以前の遺構面を3面確認した。上位の遺構面から順に第1～3遺構面と呼称する。なお、II層上面にも生活面は存在すると考えられるが、II層の形成年代が近代以降であることから、調査の対象からは除外した。

さて、上記のうち、III・IV層から出土した主な遺物を概観する。1～5はIII層出土遺物である。1は肥前系磁器碗、2は肥前系陶器皿、3は唐津焼の皿、4はキセルの雁首、5は寛永通宝(新)である。6～9はIV層から出土した。9の弥生土器壺のように、古い時期の混入品も含まれる。6は肥前系陶器碗、7は土師質土器擂鉢、8は土師質土器鍋である。

(3) 各遺構検出面の概要(図7・26・35)

第1遺構面では、土坑・井戸・溝・ピットなど、多数の遺構を検出した。これらの遺構の多くは重複関係を有して、調査区全域に偏りなく分布する。なお、多くの遺構の形状は不整形で、個別の遺構の具体的な用途を特定することは困難である。各遺構から出土した遺物を判断材料として、第1遺構面は近世後半に帰属する遺構面と考えられる。

第2遺構面では、土坑・ピット・井戸・溝などの遺構を検出した。遺構の密度は第1遺構面と

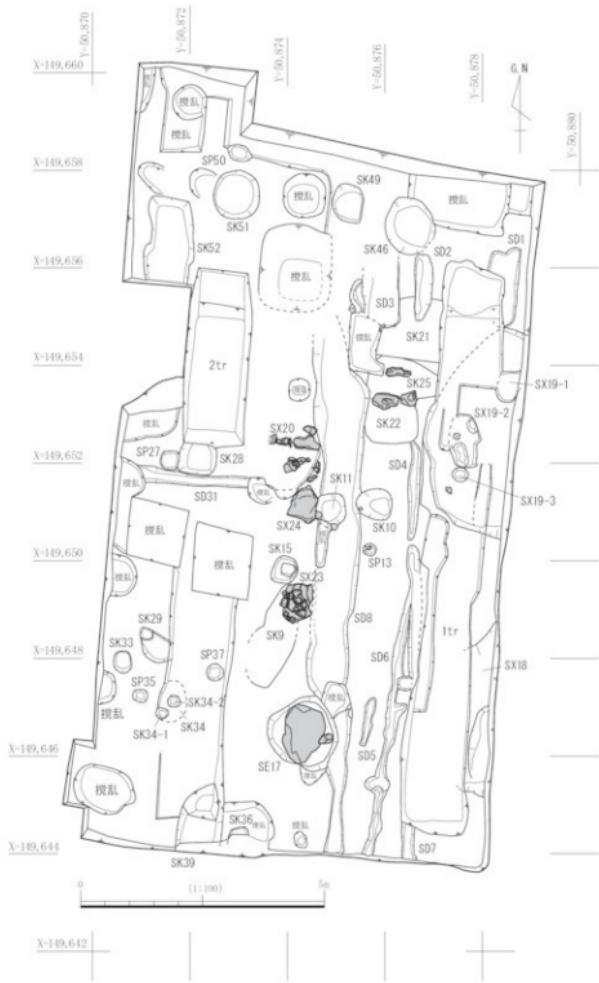


図7 第1構造面 平面図 (1/100)

比較して高くはない。しかし、調査区中央付近で南北溝、調査区北端で東西溝を検出していることから、敷地内の土地利用の様子を推定する手掛かりの多い遺構面と位置付けられる。各遺構から出土した遺物から、第2遺構面は近世前半に帰属する遺構面と考えられる。

第3遺構面では、土坑・井戸・ピットを数基検出した。遺構数は上位2面の遺構面と比較して著しく少なく、かつ遺構の分布に極端な偏りが認められる。他の遺構面との遺構数の比較から、本遺構面での積極的な土地利用を推定することは困難な状況と考えられる。遺構出土の遺物から、第3遺構面は近世初頭に帰属する遺構面と考えられる。

(4) 第1遺構面の遺構・遺物（図7）

発掘調査で検出した遺構は、遺物が出土していない遺構も存在するため、すべての遺構の帰属時期を特定することはできなかった。以下では、遺構の種類別に報告し、かつ時期の推定が可能な遺構のみ、帰属時期を記載する。

第1遺構面で検出したのは、土坑、井戸、性格不明遺構、溝、ピットで、その多くが重複関係を有する遺構である。

a 土坑

SK9（図8・9） 調査区中央やや南側に位置する土坑である。SK9はSX23と重複関係を有し、SX23の石材の下位にSK9の埋土が続くことを確認した。よって、SK9はSX23に先行する遺構と判断できる。SK9の平面形は南北方向に長い楕円形で、南側が高く、北側が一段窪む形状となる。断面形状は逆台形を呈する。SK9の長軸は約2.2m、短軸は約0.8m、深さは約0.3mである。埋土は2層に細分でき、上層が灰黄色細砂混じりシルト、下層はにぶい黄色シルト混じり粘土である。

SK9からは、図化できなかった遺物も含めて、肥前系磁器、肥前系陶器、備前系陶器、瓦などが出土した（10～14）。肥前系磁器碗は薄手の資料を含むが、外面に2重網目、内面に1重網目の染付（10）が認められるなど、やや古相の碗も存在する。

SK10（図8・9） 調査区中央やや東側に位置する土坑である。SK10とSD8は重複関係を有しており、平面での観察から、SD8の埋土を掘り込んでSK10が掘削されていることを確認した。よって、SD8よりもSK10が新しい遺構であることが分かる。SK10の平面形は東西に長い楕円形で、長軸は約0.7m、短軸は約0.6m、深さは約0.1mである。埋土は、褐灰色細砂混じりシルトの单層である。

SK10からは、図化できなかった遺物も含めて、肥前系磁器、備前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、軟質施釉陶器、瓦、目皿などが出土した（15～20）。遺物組成に、軟質施釉陶器の屋島焼鍋（17）が含まれ、わずかにガラス片が混入する。以上のことから、SK10は様相8以降の遺構と考えられる。

SK11（図8・9、図版2-2） 調査区中央やや東側に位置し、SK10の西側に掘削された土坑である。SK11とSD8は重複関係を有し、平面での観察からSD8の埋土を掘り込んでSK11が掘削されていることが観察できた。よって、SD8よりもSK11が新しい遺構であることが分かる。また、SK11はSX24と隣接しているが、断面で観察した結果、双方に重複関係は認められなかった。

SK11の平面形は隅丸方形で、長軸は約0.8m、短軸は約0.6m、深さは約0.2mである。埋土は2層に細分でき、上層が褐灰色細砂混じりシルト、下層が褐灰色シルト混じり細砂である。

SK11からは、図化できなかった遺物も含めて、肥前系磁器、備前系陶器、軟質施釉陶器、大谷焼、土師質土器、金属製品、貝、漆喰等が出土した（21～28）。図化できなかったが、軟質施釉陶器の屋島焼が含まれることから、SK11は様相7の遺構と考えられる。

SK15（図8） 調査区中央に位置し、SX23と隣接する土坑である。SK15の平面形は隅丸方形で、

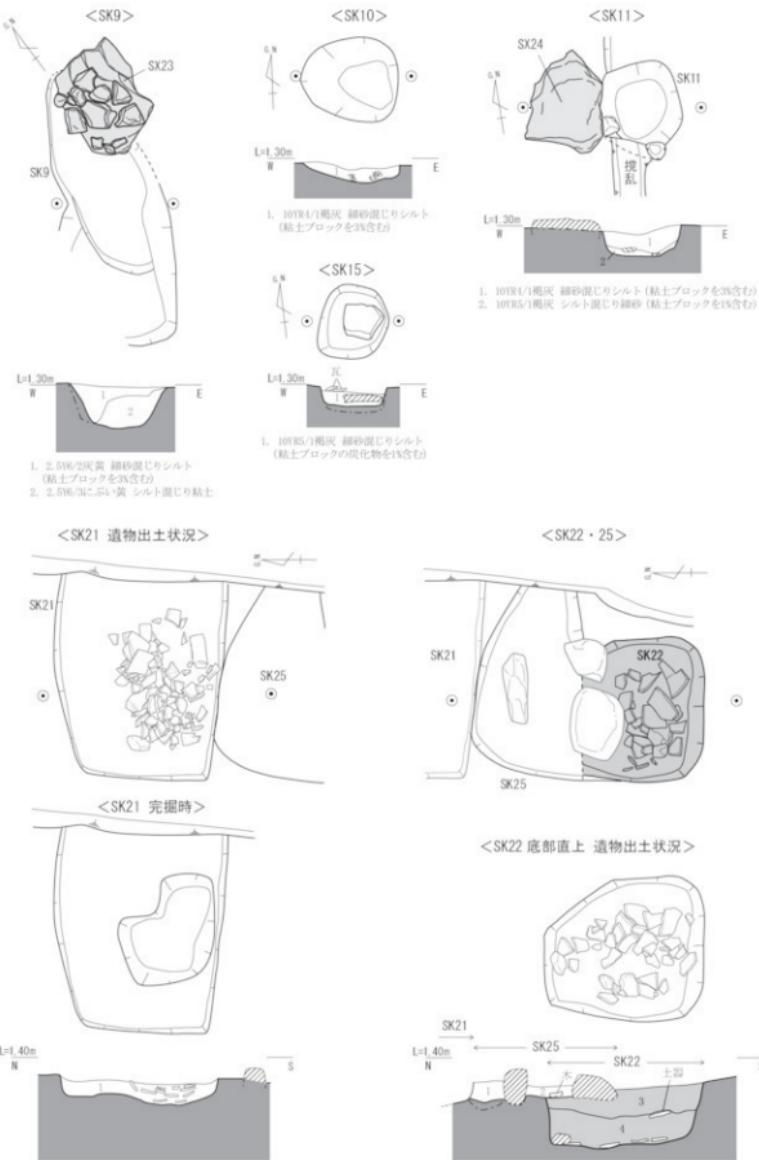


図8 第1造横面 土坑 平面図・断面図(1) (1/40)

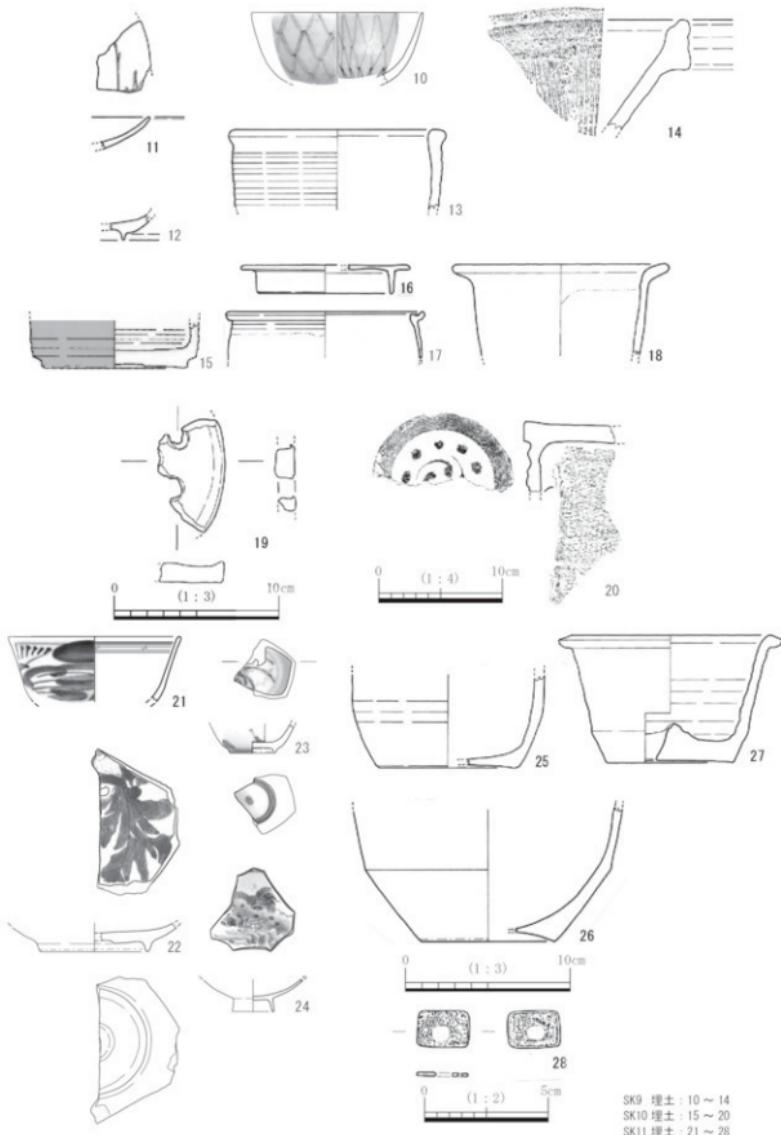


図9 第1造横面 土坑 出土遺物(1) (土器・土製品1/3、瓦1/4、金属製品1/2)

SK9 墓土 : 10 ~ 14
SK10 墓土 : 15 ~ 20
SK11 墓土 : 21 ~ 28

長軸は約 0.6 m、短軸は約 0.5 m、深さは約 0.2 m である。埋土は、褐灰色細砂混じりシルトの単層である。

SK15 からは図化できる遺物は出土していないが、磁器片や土師質土器羽釜片、瓦片が出土した。
SK21（図 8・10、図版 2-3） 調査区北東側に位置する土坑である。SK21 は、他に SD 2・3、SK25 の 3 基の遺構と重複関係を有する。平面と断面で観察した結果、SK21 は SD 2・3 よりも古く、SK25 よりも新しい遺構であることが判明した。

SK21 の平面形は一部を確認できなかったが、概ね長方形を呈すると考えられる。長軸は 1.5 m 以上、短軸は約 1.3 m、深さは約 0.2 m で、土坑底部の中央付近がやや窪む。埋土はにぶい黄色シルト混じり粘土の単層である。後述するが、大量の瓦が出土していることから、廃棄土坑と考えられる。

SK21 からは、図化できなかった遺物も含めて、肥前系磁器、肥前系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器、土師質土器、瓦が出土した（29～37）。遺物組成のうち、瓦が大多数を占める点が特徴である。土器では、やや古相を示すと考えられる磁器蓋（29）なども含むが、軟質施釉陶器の屋島焼蓋・土瓶等（31～33）を含むことから、SK21 は様相 7 の遺構と考えられる。

SK22（図 8・11～14、図版 2-4） 調査区北東側に位置する土坑である。SK22 は SK25 と重複関係を有する。断面での観察結果から、SK22 は SK25 よりも古い遺構であることが判明した。

SK22 の平面形は隅丸方形で、長軸は約 1.2 m、短軸は約 1.1 m、深さは約 0.5 m である。埋土は 2 層に細別でき、上層が灰黄色細砂混じりシルト、下層が黄灰色細砂混じりシルトである。

SK22 の上層及び底部直上から、土師質土器甕の破片が多数出土した。これらの破片の多くが接合関係を有し、2 個体に復元できた。甕はある程度の形状まで接合・復元が可能であった（80・81）。また、SK22 からは多量の瓦が出土した点は特筆できる。以上のことから、SK22 は、廃棄土坑と考えられる。

SK22 の遺物は、一括して取り上げたものと、それ以外に「上層」・「下層」・「底部直上」に区分して取り上げた（38～81）。出土したのは肥前系磁器、肥前系陶器、備前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、大谷焼、軟質施釉陶器、土師質土器、焼塙壺蓋、目皿、瓦などである。このうち、組成の多数を占めるのが瓦類である。全体の傾向として、底部直上から比較的古相と考えられる肥前系陶器皿（76）が出土したが、一方で軟質施釉陶器の屋島焼鍋（59）・土瓶（71）、さらに肥前系磁器広東碗（40・41）、肥前系磁器皿で高台が蛇目圓形高台（54）などが含まれる。また、肥前系磁器碗の形態が多様化する点も指摘できる。以上のことから、SK22 は様相 7 の遺構と考えられる。

SK25（図 8） 調査区北東側に位置する土坑である。SK25 は、他に SK21・22 の 2 基の遺構と重複関係を有する。平面と断面での観察の結果、SK25 は SK21 よりも古く、SK22 よりも新しい遺構であることが明らかとなった。なお、SK25 と重複する位置で三石の石材が認められるが、平面・断面での観察の結果、石材は SK25 の掘り形や埋土と調和的な位置にないことから、これらの石材は SK25 とは直接関わらない、後後に設置された石材と判断した。

SK25 の平面形は不整形で、長軸は 1.6 m 以上、短軸は 1.4 m 以上、深さは約 0.2 m である。埋土は 2 層に細別できるが、いずれも土質の類似した細砂混じりシルトである。SK25 から、遺物は出土していない。

SK28（図 15） 調査区中央やや西側に位置する土坑である。SK28 は SP27・SD31 と重複関係を有する。平面・断面での観察から、SK28 は SP27 よりも古く、SD31 よりも新しい遺構であることが明らかとなった。

SK28 は一部、試掘調査のトレントと重複するため遺構全体を同時に調査できなかったが、平面形は概ね隅丸方形を呈し、東西長は約 0.8 m、南北長は 0.6 m 以上、深さは約 0.2 m である。埋土は黄灰色細砂混じりシルトの単層である。SK28 から遺物は出土していない。

SK29（図 15） 調査区南西側に位置する土坑である。SK29 は一部、試掘調査のトレントと重複す

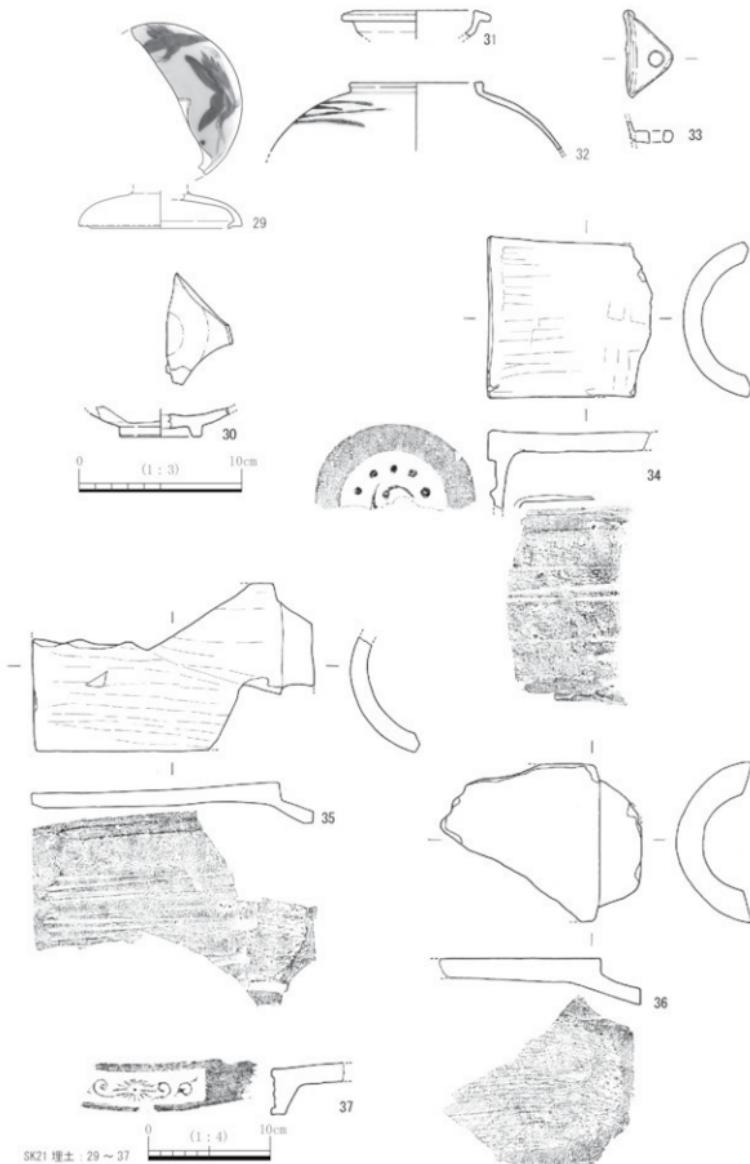


図10 第1造横面 土坑 出土遺物(2)(土器1/3、瓦1/4)



図11 第1造横面 土坑 出土遺物(3)(土器・土製品1/3、瓦1/4)

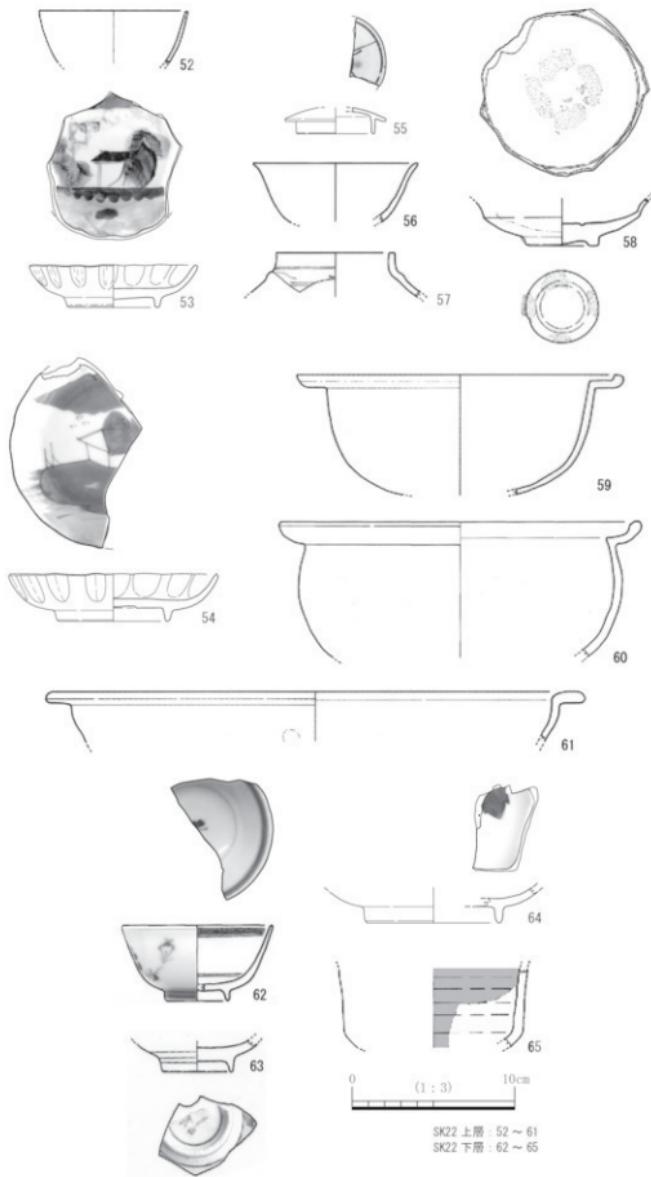


図12 第1造構面 土坑 出土遺物(4)(土器1/3)

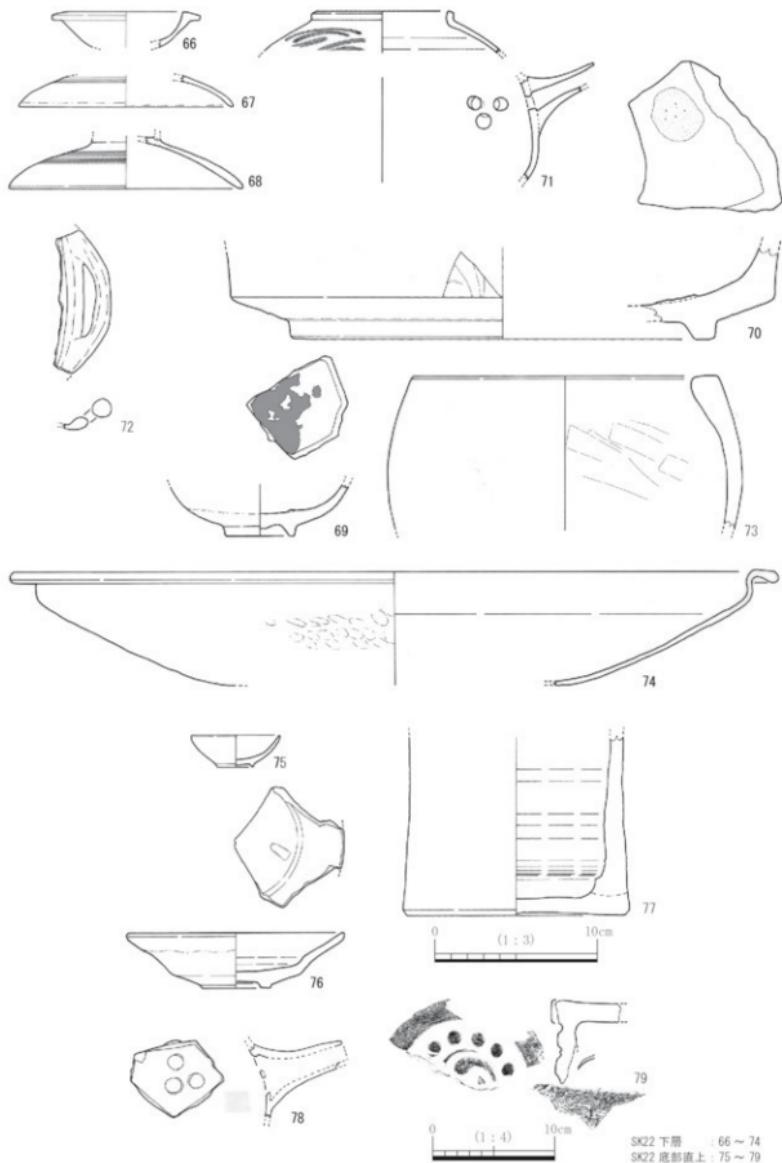
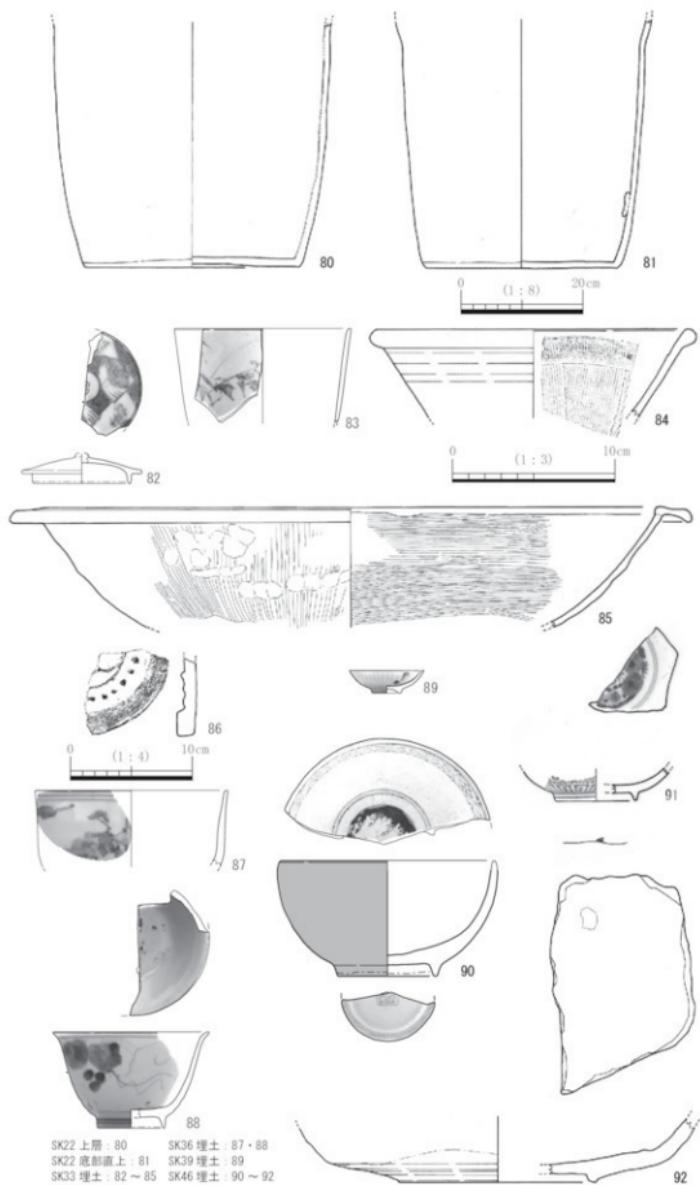


図 13 第 1 造横面 土坑 出土遺物 (5) (土器 1/3、瓦 1/4)



SK22 上層 : 80 SK36 理土 : 87 + 88

SK22 底部直上 : 81 SK39 理土 : 89

SK33 理土 : 82 ~ 85 SK46 理土 : 90 ~ 92

SK34 理土 : 86

圖 14 第 1 造橫面 土坑 出土遺物 (6) (土器 1/3・1/8、瓦 1/4)

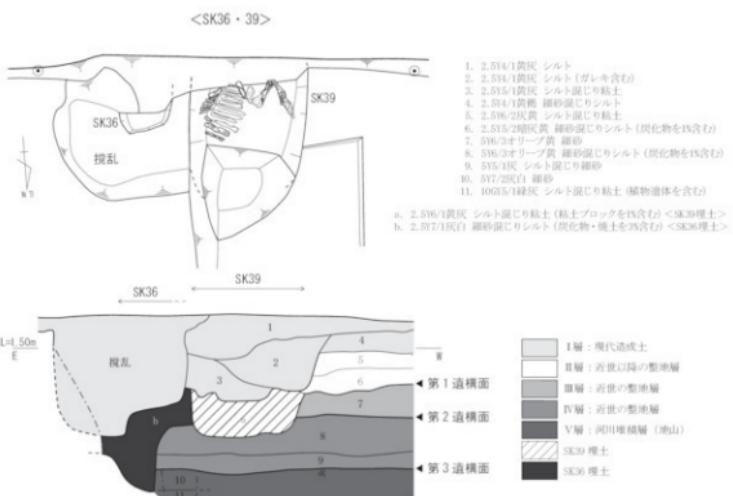
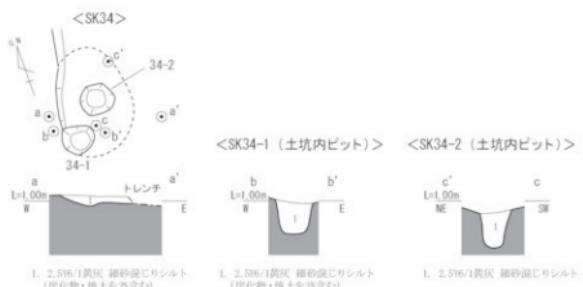
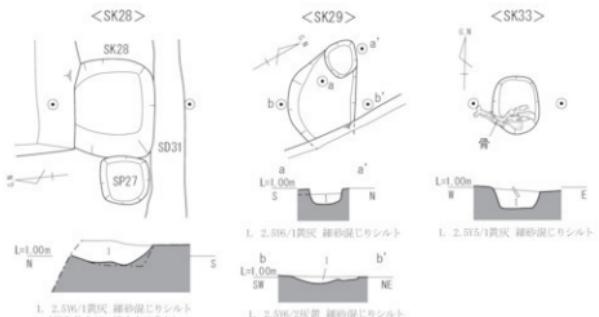


図15 第1道横面 土坑 平面図・断面図 (2) (1/40)

るため遺構全体を同時に調査できなかつたが、平面形は歪な楕円形を呈するものと考えられる。SK29の長軸は0.7m以上、短軸は約0.6m、深さは約0.1mである。埋土は灰黄色細砂混じりシルトの単層である。

埋土除去後のSK29底部で、円形のピットを1基検出した。ピットの直径は約0.3m、深さは約0.1m、埋土は黄灰色細砂混じりシルトの単層である。SK29から遺物は出土していない。

SK33（図14・15） 調査区南西側に位置する土坑である。SK33の検出作業中、遺構を検出した高さで骨片を多数確認した。骨の出土位置等の記録を作成したのちにSK33の調査に移行した。SK33の掘り形と骨片の範囲を照合すると、掘り形からはみ出す位置に骨片が位置することから、骨片はSK33に伴わないと判断した。

SK33の平面形は楕円形を呈し、長軸は約0.5m、短軸は約0.4m、深さは約0.2mである。埋土は黄灰色細砂混じりシルトの単層である。

SK33からは、國化できなかつた遺物も含めて、肥前系磁器、京・信楽系陶器、土師質土器がある（82～85）。82は色絵を施す磁器蓋で、やや古相を示す遺物と考えられる。85の土師質土器炮烙は、やや浅手化の傾向が観察できる。これ以外に、國化できた遺物はないが、薄手の肥前系磁器の破片がわずかに認められた。

SK34（図14・15） 調査区南西側に位置する土坑である。SK34は試掘調査のトレーナーと重複するため、遺構底部の窪みをわずかに確認した程度である。SK34の掘り形は、楕円形を呈するものと考えられる。埋土は、黄灰色細砂混じりシルトの単層である。埋土除去後のSK34底部で、2基のピットを検出した。SK34-1は直径約0.3m、深さ約0.3mのピットで、黄灰色細砂混じりシルトの単層である。SK34-2は直径約0.3m、深さ約0.3mのピットで、黄灰色細砂混じりシルトの単層である。

SK34からは、國化できなかつた遺物も含めて、瓦や土壁が出土した。86の巴文軒丸瓦は、巴尾部が細長く、珠文が小ぶりであることから、佐藤編年の様相1に位置付け得る資料と考えられる。ただし、それ以外に時期を推定する遺物は出土していない。

SK36（図14・15） 調査区中央南側に位置する土坑である。搅乱によって遺構の大部分を失う。SK36の埋土は、炭化物を含む灰白色細砂混じりシルトである。

SK36からは、國化できなかつた遺物も含めて、肥前系磁器や土師質土器片などが出土した（87・88）。88は肥前系磁器小杯である。

SK39（図14・15、図版2-5・6） 調査区南西側に位置する遺構である。SK39は南側が調査区の外側に続くため、遺構の全容は不明である。SK39の東側に隣接してSK36が位置するが、断面の観察から、SK36よりもSK39の方が新しい遺構であることが分かる。

SK39の埋土は、黄灰色シルト混じり粘土の単層である。埋土除去後の遺構底部直上で、交通した状態と見られる骨が出土した。骨の部位は肋骨及び大腿骨と考えられ、折り曲げた足を南に向かって出土したと考えられる。底部直上で骨の配置と状態から、これらの骨は焼成を受けず土坑内にそのまま埋葬された状態と考えられる。

SK39からは、國化できない遺物も含めて、肥前系磁器、瓦が出土した（89）。89は肥前系磁器紅皿で、口径は約4.6cm、口縁端部は平らな面を有する。

SK46（図14・17、図版2-7） 調査区北東側に位置する土坑である。SK46は、後世の搅乱によつて北側の一部分を破壊される。SK46の平面形は楕円形で、長軸約1.2m、短軸約0.9m、深さ約0.3mである。埋土は2層に細別でき、上層は黄灰色細砂混じりシルト、下層は灰黄色細砂混じりシルトである。

SK46からは、國化できなかつた遺物も含めて、肥前系磁器、肥前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、瓦が出土した（90～92）。90は青磁染付の碗、91は薄手の半球形の碗である。これ以外の肥前系磁器はいずれも薄手の資料である。以上のことから、SK46は様相7の遺構と考えられる。

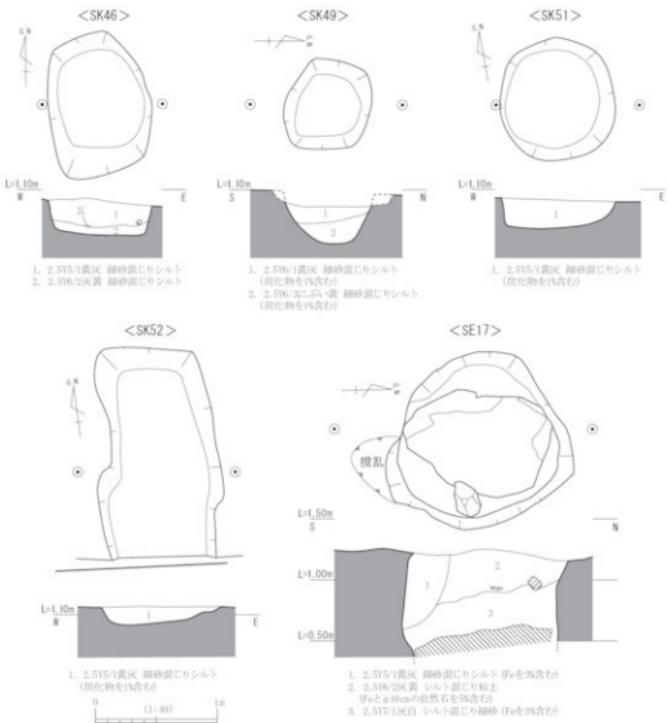


図16 第1造横面 土坑 平面図・断面図(3)、井戸 平面図・断面図(1/40)

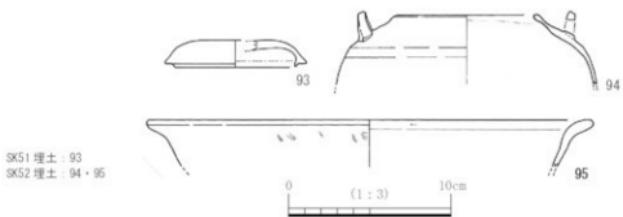


図17 第1造横面 土坑 出土遺物(7)(土器1/3)

SK49(図17) 調査区北側に位置する土坑である。SK49の平面形はほぼ円形で、直径約0.7m、深さ約0.4mである。埋土は2層に細別でき、上層は炭化物を1%含む黄灰色細砂混じりシルト、下層は炭化物を1%含むにぶい黄色細砂混じりシルトである。SK49から遺物は出土していない。

SK51(図16・17) 調査区北西側に位置する土坑である。SK51の平面形はほぼ円形で、直径約1.0m、

深さ約0.2mである。埋土は炭化物を1%含む黄灰色細砂混じりシルトの単層である。

SK51からは、図化できなかった遺物も含めて、肥前系磁器、産地不明の陶器、土師質土器、瓦が出土した(93)。93は肥前系磁器蓋である。

SK52(図16・17) 調査区北西側に位置する遺構である。SK52は、遺構の南側が現代の井戸によって破壊されていると考えられたため、遺構の全てを調査できなかった。しかし、北側の遺構の形状から土坑と判断した。SK52は南北方向に長い溝状を呈し、南北長は1.7m以上、東西長は約1.0m、深さは約0.2mである。埋土は、炭化物を1%含む黄灰色細砂混じりシルトの単層である。

SK52からは、図化できなかった遺物も含めて、肥前系磁器、肥前系陶器、産地不明の陶器、土師質土器、瓦が出土した(94・95)。肥前系磁器はいずれも薄手の資料で、95の土師質土器炮烙にも浅手化の傾向が見られる。

b 井戸

SE17(図16・18、図版3-1) 調査区中央南側に位置する井戸である。SE17はSD8と重複関係を有し、平面での観察から、SD8が古くSE17が新しいことが明らかとなった。SE17の平面形はやや歪な円形で、直径は約1.5mである。検出面から0.6mの深さまで埋土を除去すると、掘り形とほぼ等しい大きさの石材が露出した。この石材は、平らな面を上に向けた状態であった。このことから、この石材は廃棄したというよりも、意図的に井戸内に据え置かれた石材の可能性があると考えられる。井戸内の石材までの埋土は3層に細別できる。ただし、石材よりも下位は、石材を取り上げることができなかつたため、調査できなかつた。

SE17の石材よりも上の土層からは、肥前系磁器、備前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、大谷焼、土師質土器、瓦が出土した(96~105)。104は小型の土師質土器皿で、胎土は橙色系を呈する。105は巴文軒丸瓦で、珠文は12個、キラコの使用が認められる。これらの遺物に混じって、ガラス片もわずかに認められた。このため、SE17は様相8以降に廃絶したと考えられる。

c 性格不明遺構

SX18(図19・20、図版3-2) 調査区南東側に位置する遺構である。SX18は、遺構の東側が調査区の外側へと続くため、遺構の全容は不明である。確認した範囲で、SX18は円形を基調とした掘り形と考えられ、南北長は約3.7m、深さは最深部で0.3mである。埋土は2層に細分でき、上層が炭化物を7%含む暗灰黄色シルト混じり粘土、下層が灰黄色細砂混じりシルトである。埋土に炭化物を含むことや掘り形の形状が円形基調であることは、北側に隣接して存在するSX19と類似する。遺構の性格の特定は困難だが、大型の土坑状の遺構の可能性が考えられる。

SX18からは、図化できなかった遺物も含めて、肥前系陶器、備前系陶器、土師質土器、瓦、土壁が出土した(106・107)。106は古相を示すと考えられる肥前系陶器皿である。107は土師質土器皿で、底部に糸切り痕を残す皿AIIIと考えられる。遺構から肥前系磁器の出土が認められず、全体的に古相の遺物が主体を占めると考えられる。

SX19(図19・20、図版3-3~5) 調査区中央東側に位置する遺構である。SX19は、遺構の東側が調査区の外へと続くため、遺構の全容は不明である。確認した範囲で、SX19は円形を基調とした掘り形で、南北長は約4.2m、最深部の深さは約0.4mである。埋土は2層に細分でき、上層が炭化物・焼土を1%含む暗灰黄色細砂混じりシルト、下層が炭化物・焼土を10%含むにぶい黄色シルトである。平面・断面での観察から、特に下層に多くの炭化物・焼土が認められた。また、遺構底部の一部で被熱した痕跡を確認した。

遺構の底部では、合計3基の遺構(SX19-1~3)を確認した。SX19-1・2は梢円形を呈す

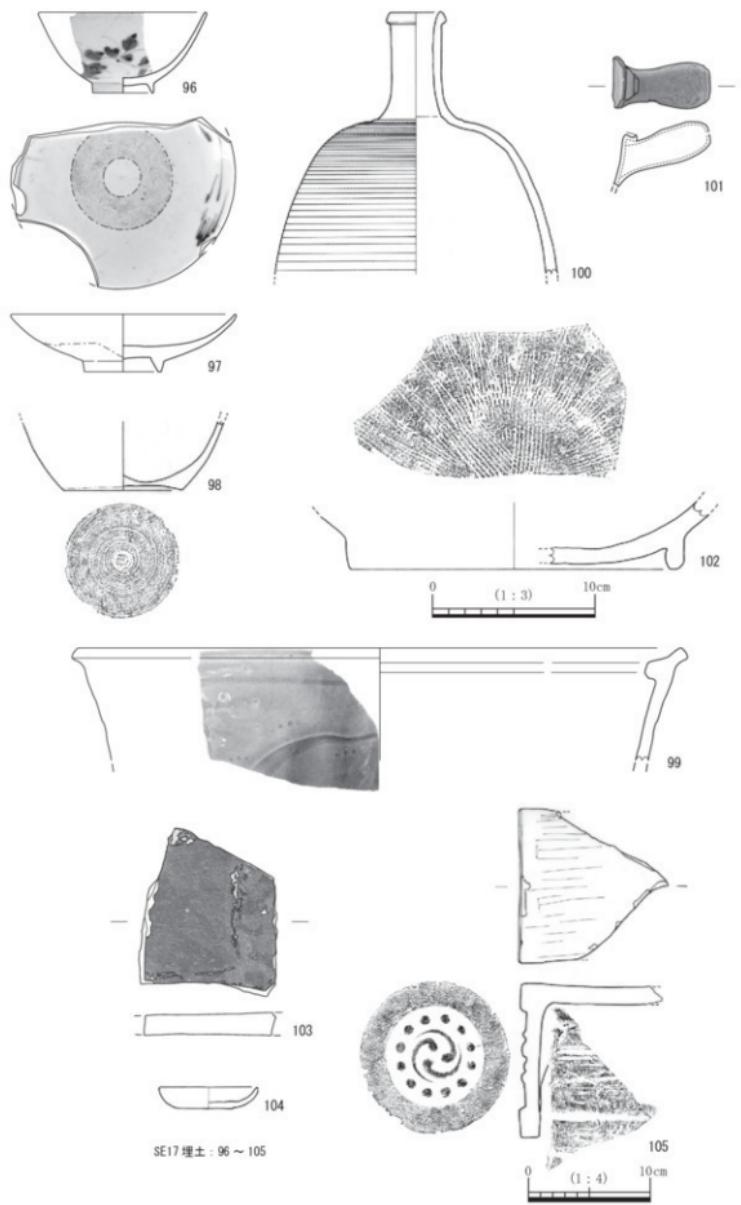


図 18 第1造横面 井戸 出土遺物 (土器 1/3、瓦 1/4)

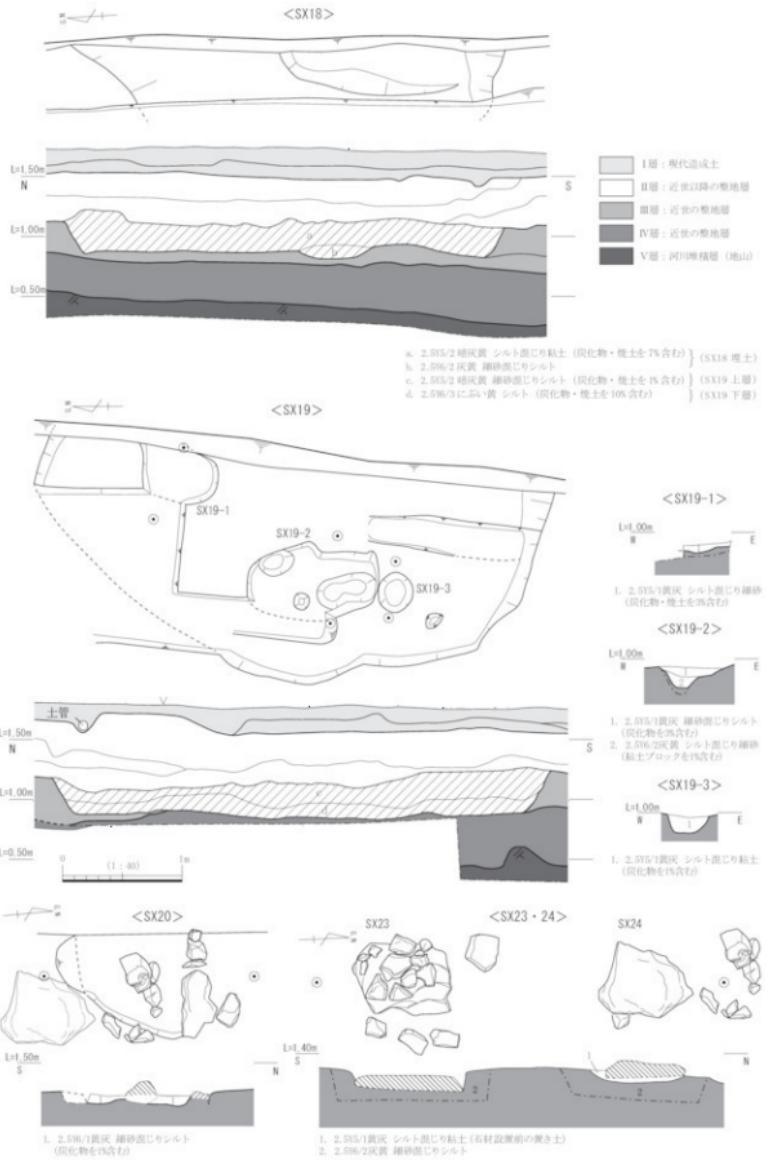


図 19 第1造構面 性格不明造構 平面図・断面図 (1/40)

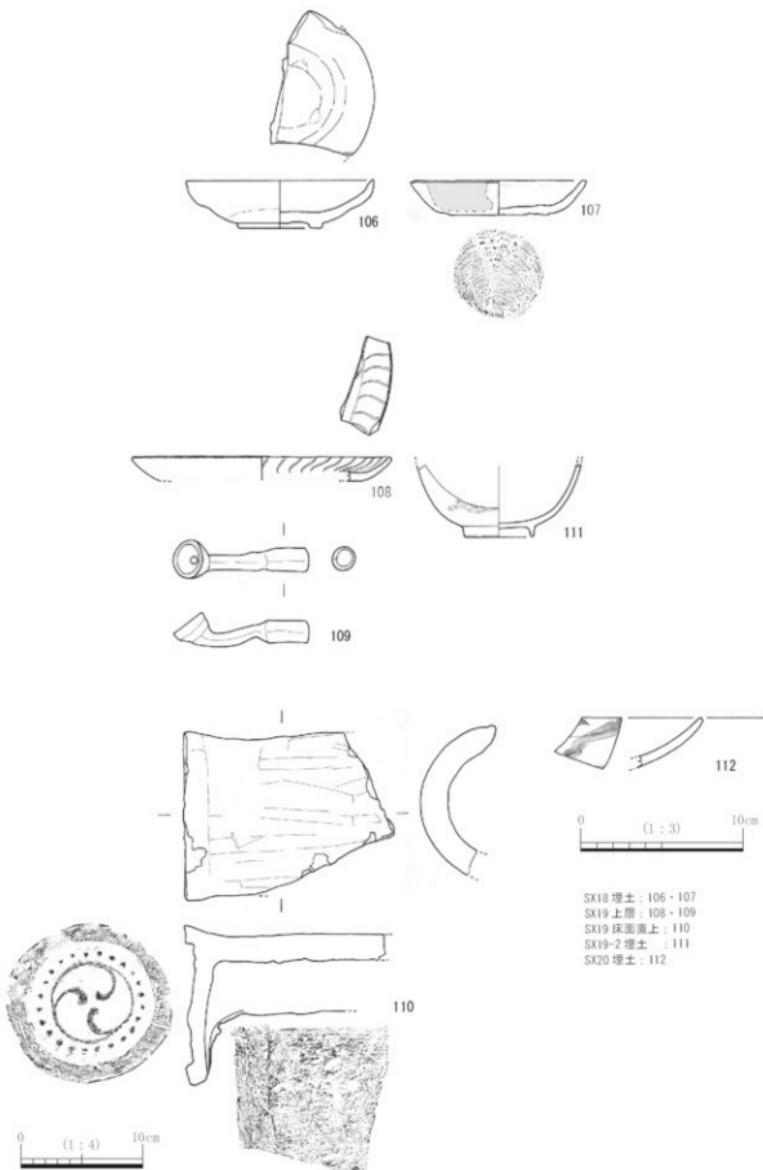


圖 20 第 1 遷橫面 性格不明遺構 出土遺物（土器 1/3・1/8、瓦 1/4、金屬製品 1/2）

る土坑状の遺構、SX19-3は円形を呈するピットである。いずれもSX19の床面で検出した遺構で、炭化物・焼土を含む類似した埋土である。SX19の性格は、大型の土坑状の遺構の可能性などが考えられる。

SX19からは、図化できなかった遺物も含めて、肥前系磁器、肥前系陶器、土師質土器、目皿、金属製品、瓦、土壁が出土した（108～111）。肥前系磁器は薄手の資料が見られる。110の巴文軒丸瓦は、珠文が多く、巴尾部も細いことから、古相を示す資料と考えられる。111は高台断面U字形の肥前系磁器碗である。

SX20（図19・20、図版3-6） 調査区中央付近に位置する遺構である。SX20の掘り形は、遺構の東・南側では円弧を描く形状を確認できたが、他の箇所では検出できなかった。また、SX20の掘り形に伴うような位置で、石材を複数石確認した。特に北側の石材は、SX20の底部から壁面が立ち上がる遺構の北肩に位置することから、SX20に関連した石材と判断した。これらの石材は、SX20の北肩に沿って西へ直線的に1.0m程度並ぶが、それよりも西側では掘り形及び石材は確認できなかった。SX20の埋土は、黄灰色細砂混じりシルトの単層である。遺構の性格は、石材を伴う土坑状の遺構の可能性がある。

SX20からは、図化できなかった遺物も含めて、肥前系磁器、瓦が出土した（112）。112は肥前系磁器皿で、これ以外の磁器片も薄手の資料である。

SX23・24（図19、図版3-7） 調査区中央付近に位置する2石の大型の石材で、南側をSX23、北側をSX24と呼称する。双方は類似した形状の石材であることから、関連性を推定して合わせて報告する。

双方は、南北方向に芯々間で約2.0mの距離を置いて位置する。双方の石材は、いずれも長軸約0.8m、短軸約0.5mの大きさで、石材の天端の高さは、SX24の方がSX23よりも10cm程度高い、標高1.3mである。また、双方の石材は、平滑な面を上に向けた状態という共通点がある。

SX23は、断面で明確に掘り形を確認できなかったが、石材の天端の高さが第1遺構面よりも低い位置にあることから、浅い掘り形を掘削したのちに石材を設置した可能性が考えられる。一方、SX24は、検出面から0.1mの深さの掘り形を断面で確認できたことから、整地層に掘り形を掘削したのちに石材を設置したことが分かる。

SX23・24の性格は、他に関連すると見られる遺構が明確でないため断定できないが、石材の配置と形状から、建物の礎石になる可能性が考えられる。SX23・24から遺物は出土していない。

d 溝

調査区内で9条の溝を検出した。これらの溝は、大別して2種類の埋土に分けることができる。SD1～3は黄色系で粘性のある土質、SD4～8・31は灰色系でシルト・細砂を主体とする土質である。

SD1（図21） 調査区北東側に位置する南北方向の溝である。試掘トレーナーに一部がかかるため、同時に掘り形の全てを確認することはできなかった。SD1の長さは約1.1m、幅は約0.4m、深さは約0.1mである。埋土は、粘土ブロックを含む浅黄色シルト混じり粘土の単層である。

SD1からは、図化できない磁器・陶器・瓦片が出土した。

SD2（図21） 調査区北東側に位置し、SD1の西側にある南北方向の溝である。SD2は、長さは約0.9m、幅は約0.2m、深さは約0.1mである。埋土は、粘土ブロックを含む浅黄色シルト混じり粘土の単層である。

SD2からは、図化できなかったが、肥前系磁器、瓦が出土した。出土した肥前系磁器は、大半が薄手の資料である。

SD3（図21・22） 調査区中央北側に位置する南北方向の溝である。SD3は、SD2の西側に隣

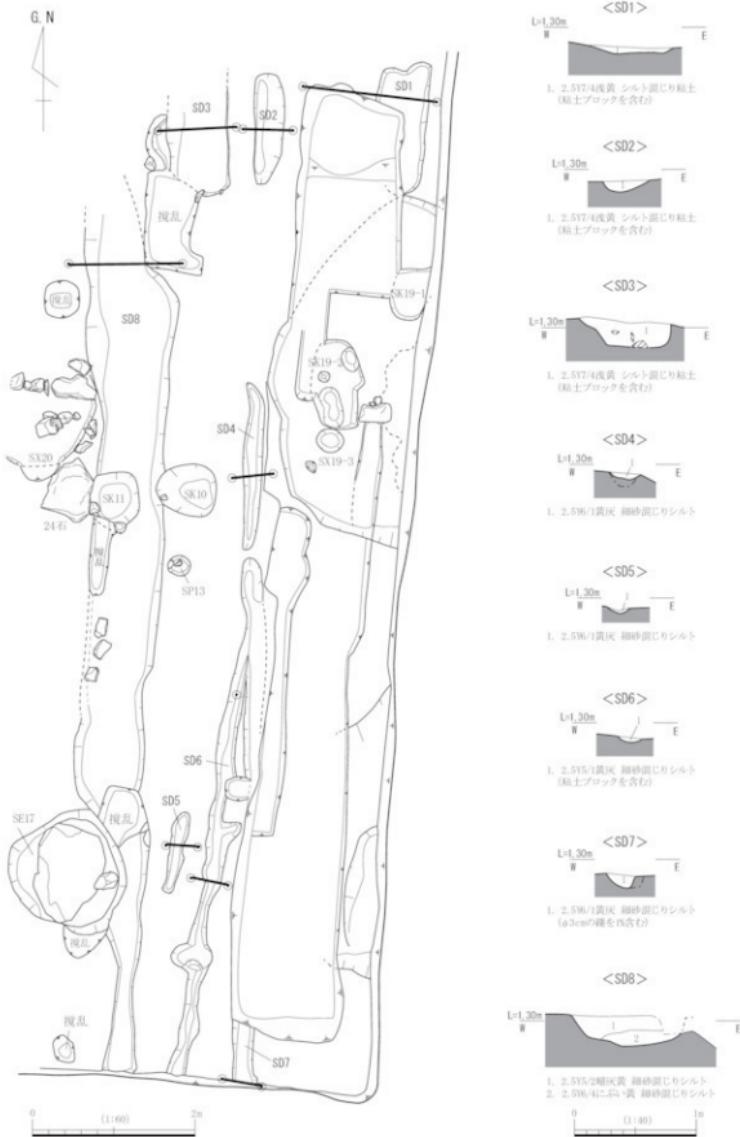


図21 第1造横面溝 平面図・断面図 (1/60・1/40)

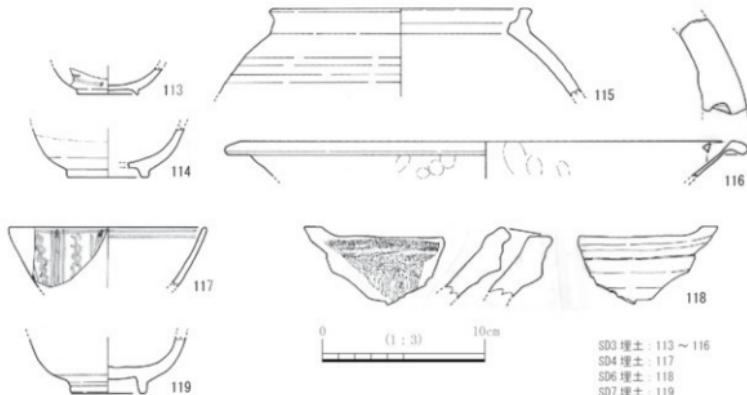


図22 第1造横面溝出土遺物(1)(土器1/3)

接する。SD 3の北側は掘り形が遺存しておらず、検出することはできなかった。SD 3は、長さ0.9 m以上、幅は約0.5 m、深さは約0.2 mで、西壁面は緩やかに立ち上がり、東壁面は直立した形状である。埋土は、粘土ブロックを含む浅黄色シルト混じり粘土の単層である。

SD 3からは、肥前系磁器、備前系陶器、土師質土器が出土した(113～116)。肥前系磁器は薄手の碗(113)等が主体で、116の土師質土器炮烙の器形は浅手化の傾向が見られる。

SD 4 (図21・22) 調査区東側に位置する南北方向の溝である。SD 4は南北に2つに分かれた状態で掘り形を検出した。双方は約10 cmの間隔を空けて同一の主軸で掘削されていることから、一連の溝と判断した。また、SD 4の北側延長線上にはSD 2が位置するが、埋土が明瞭に異なることから、同一の溝ではないと判断した。一方、SD 4の南側延長上約1.7 mの距離にはSD 7が位置する。双方の埋土は類似するが、やや距離があるため、同一の溝と特定することはできなかった。

SD 4は南側で試掘トレンドチと重なるため、同時に掘り形を調査できず、溝の南側への延伸方向は不明である。SD 4の検出長は約3.5 m、幅は約0.2 m、深さは約0.1 mである。SD 4はSD 6と重複関係を有するが、類似した埋土で埋没していることから、同時に機能した溝と考えられる。

SD 4からは、図化していない遺物も含むが、肥前系磁器、軟質施釉陶器、瓦が出土した(117)。肥前系磁器は全般的に薄手の資料で、遺物の組成に軟質施釉陶器の屋島焼の破片が見られることを考慮すると、SD 4は様相7以降の遺構と考えられる。

SD 5 (図21) 調査区南東側に位置する南北方向の溝である。SD 5の長さは約0.7 m、幅は約0.1 m、深さは約0.1 mで、埋土は黄灰色細砂混じりシルトの単層である。

SD 5からは、時期不明の瓦片が出土した。

SD 6 (図21・22) 調査区南東側に位置する南北方向の溝である。SD 6は、SD 4と合流する箇所までの長さが約3.7 m、幅は約0.2 m、深さは約0.1 mである。埋土は、粘土ブロックを含む黄灰色細砂混じりシルトの単層である。

SD 6からは、備前系陶器、土師質土器、焼塙壺、瓦が出土した(118)。

SD 7 (図21・22) 調査区南東側に位置する南北方向の溝である。SD 7は0.5 m分を検出した。SD 7の幅は約0.2 m、深さは約0.1 mで、埋土は黄灰色細砂混じりシルトの単層である。

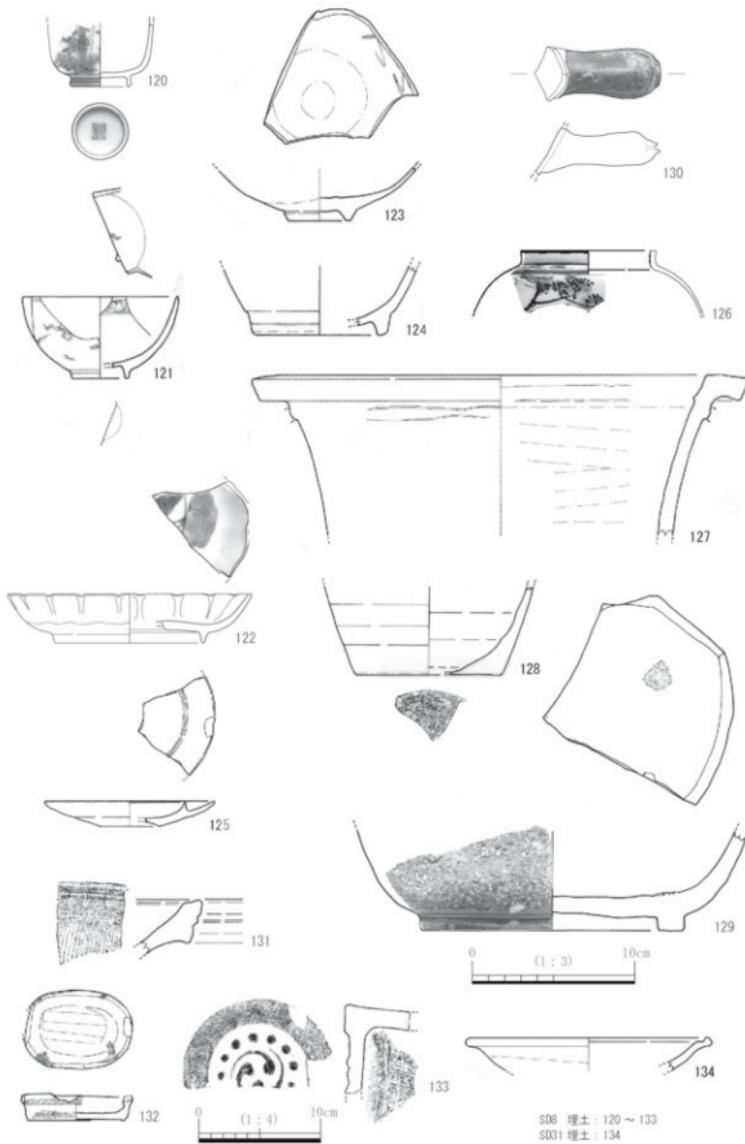


図23 第1造構面溝出土遺物(2) (土器1/3、瓦1/4)

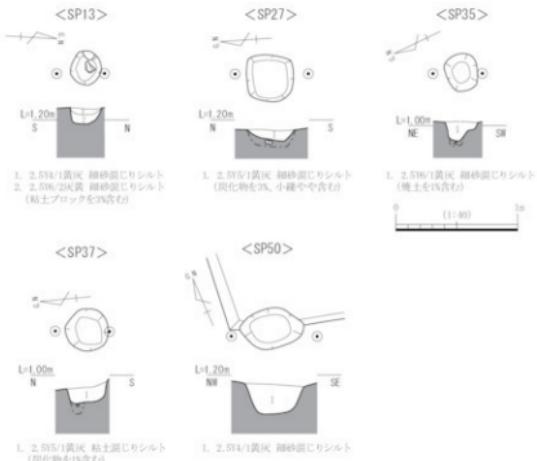


図24 第1造横面 ピット 平面図・断面図 (1/40)

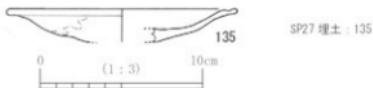


図25 第1造横面 ピット 出土遺物 (土器 1/3)

SD 7 からは、肥前系磁器碗 (119) が出土した。

SD 8 (図21・23、図版3-8) 調査区中央付近で南北方向に掘削された溝である。調査区の北側では、掘り形を検出することができなかった。SD 8 は SK10・11・SE17 と重複関係を有し、いずれの遺構よりも古いのが SD 8 である。SD 8 の検出長は約 6.9 m、幅は最大値で約 0.7 m、深さは約 0.2 m である。埋土は 2 層に細別でき、上層が暗灰黄色細砂混じりシルト、下層がにぶい黄色細砂混じりシルトである。

SD 8 からは、肥前系磁器、備前系陶器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、軟質施釉陶器、大谷焼、瓦、目皿、玩具が出土した (120 ~ 133)。肥前系磁器皿で、高台の高い蛇ノ目凹形高台 (122) を含むこと、軟質施釉陶器の屋島焼を含むことから、SD 8 は様相 7 の遺構と考えられる。

SD31 (図7-23) 調査区西側に位置する東西方向の溝である。SD31 は、調査区西半のみ確認できた。SD31 の検出長は約 2.4 m、幅は約 0.2 m、深さは約 0.1 m で、埋土は灰黄色細砂混じりシルトの単層である。

SD31 からは、古相と考えられる肥前系陶器皿 (134) が出土した。

e ピット (図24・25)

調査区内で 5 基のピットを検出した (SP13・27・35・37・50)。これらのピットはそれぞれ離れた位置で検出しており、掘立柱建物跡の復元はできなかった。ピットの掘り形は円形・楕円形・

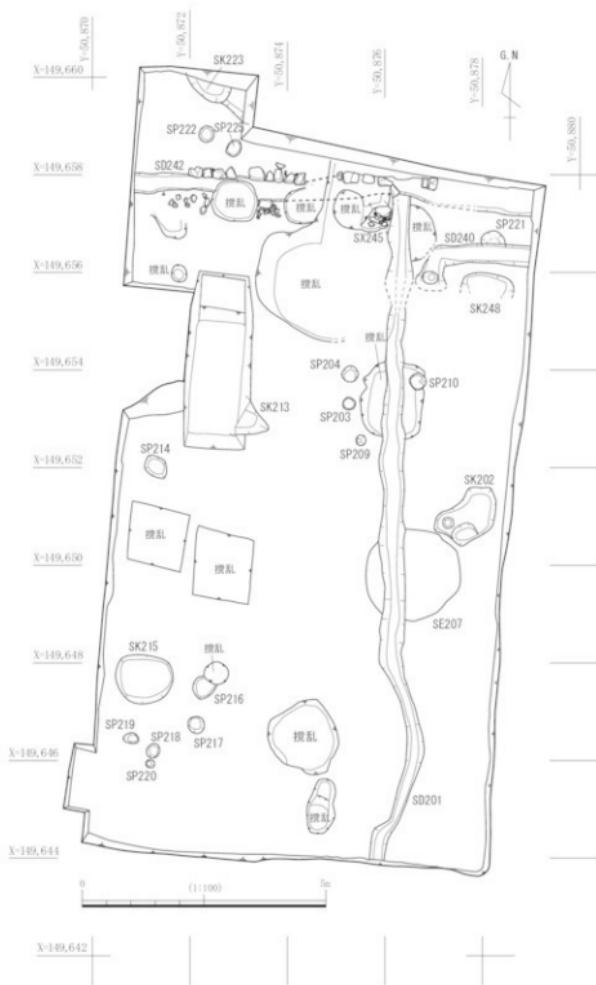


図 26 第2構造面 平面図 (1/100)

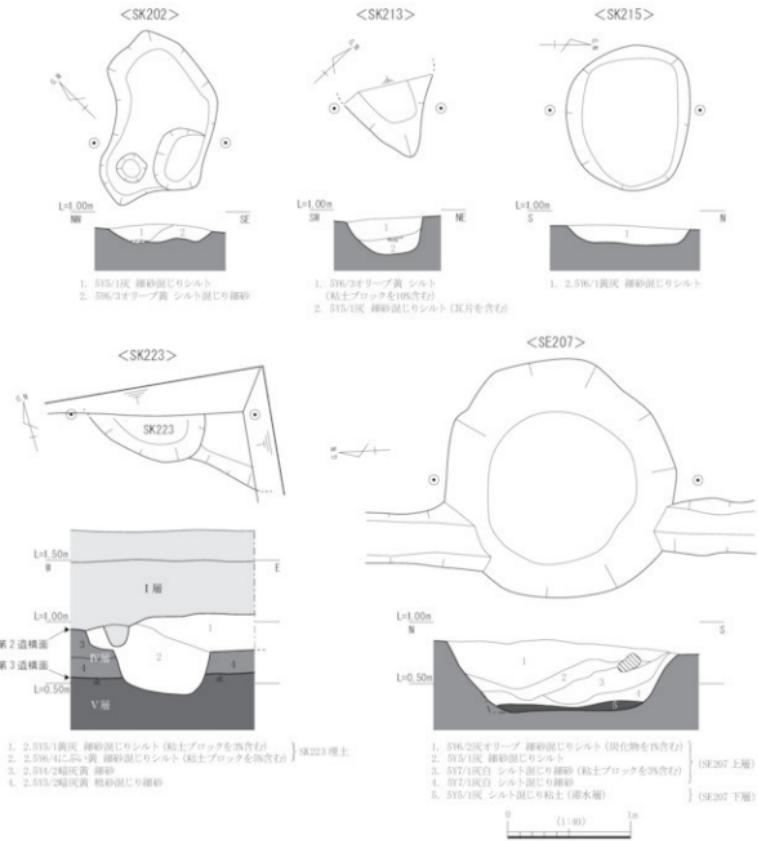


図27 第2遺構面 土坑・井戸 平面図・断面図 (1/40)

隅丸方形など多様で、直径が0.2～0.5m程度、深さは0.1～0.3m程度である。これらのピットのうち、SP27から肥前系陶器皿(135)が出土した。

(5) 第2遺構面の遺構・遺物(図26)

第2遺構面で検出したのは、土坑、井戸、溝、ピットである。

a 土坑

SK202(図27・28、図版4-2) 調査区中央東側に位置する土坑である。SK202はSE207と隣接するが、双方に重複関係はない。SK202の平面形は不整形で、南側の遺構底部が周囲よりも一段高む。SK202の長軸は約1.4m、短軸は約1.0m、深さは約0.2mである。断面形状は逆台形を呈し、埋土は2層に細分できる。上層は灰色細砂混じりシルト、下層はオリーブ黄色シルト混じり細砂である。

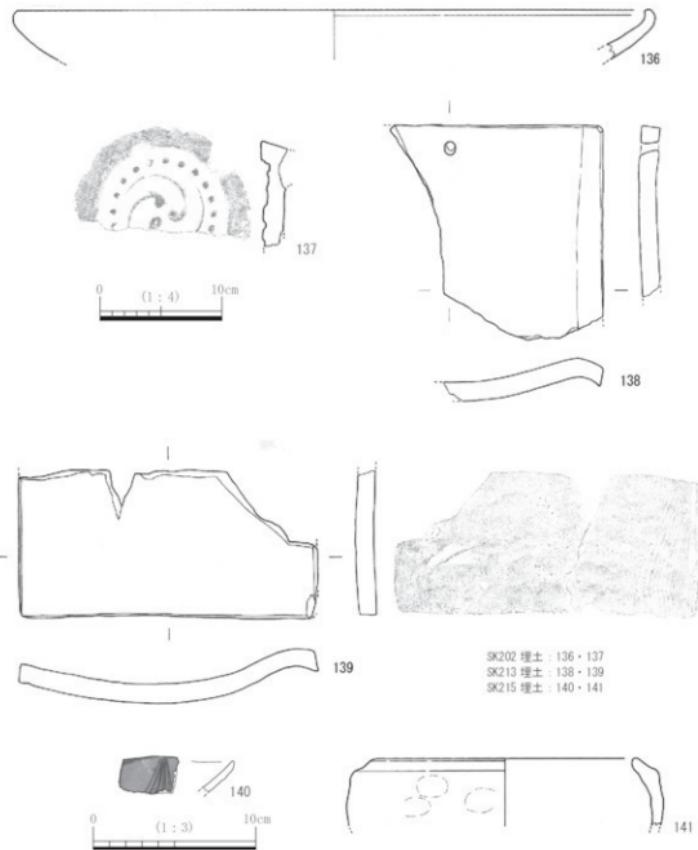


図28 第2遺構面 土坑 出土遺物（土器1/3、瓦1/4）

SK202からは、備前系陶器、瓦が出土した（136・137）。136は備前系陶器の大平鉢、137は文軒丸瓦で、珠文は小ぶりで数が多く、巴尾部が細長い古相の資料と考えられる。出土遺物には肥前系磁器は含まれておらず、かつ備前系陶器大平鉢を含む点が特徴である。

SK213（図27・28、図版4-3） 調査区中央や西側に位置する土坑である。SK213の一部は試掘トレンチと重なるため、遺構の全容を同時に確認することはできなかった。SK213の遺存する部分の平面形は梢円形で、東西長は0.6m以上、南北長は0.7m以上、深さは約0.3mである。埋土は2層に細分でき、上層が粘土ブロックを10%含むオリーブ黄色シルト、下層は灰色細砂混じりシルトである。

SK213からは、図化できなかった遺物も含めて、肥前系磁器、瓦が出土した（138・139）。138・139は棟瓦である。

SK215（図27・28、図版4-4） 調査区南西側に位置する土坑である。SK215の平面形は梢円形で、

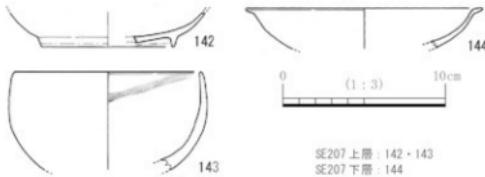


図29 第2遺構面 井戸 出土遺物（土器1/3）

長軸は約1.2m、短軸は約1.0m、深さは約0.2mである。埋土は黄灰色細砂混じりシルトの単層である。

SK215からは、肥前系陶器、瓦、土壁が出土した（140・141）。140は肥前系陶器皿である。141は土師質土器鍋で、いずれも古相を示す遺物である。また、SK215から、肥前系磁器は出土していない。

SK223（図27、図版4-5） 調査区北西側に位置する土坑である。SK223は、掘り形が調査区の外側に続くため、遺構の全形は不明である。SK223は西側が一段深く掘り込まれた形状で、浅い箇所の深さは約0.3m、深い箇所の深さは約0.6mである。埋土は2層に細分でき、上層は粘土ブロックを3%含む細砂混じりシルト、下層は粘土ブロックを5%含むにぶい黄色細砂混じりシルトである。SK223から遺物は出土していない。

SK248（図26） 調査区北東側に位置する土坑である。SK248は、遺構の南側は検出できなかった。遺存する部分から推定する遺構の平面形は隅丸方形で、南北長は0.4m以上、東西長は約1.1m、深さは約0.1mである。SK248から遺物は出土していない。

b 井戸

SE207（図27・29、図版4-6・7） 調査区中央やや東側に位置する井戸である。SE207はSD201と重複関係を有する。平面で観察した結果、SE207がSD201に先行して形成されたことが明らかとなった。SE207の平面形は円形で、直径は約1.9m、深さは約0.6mである。埋土は2層に大別できる。上層は4層に細分でき、いずれも灰色系の細砂及びシルトである。層中に炭化物や粘土ブロックを含むことから、人為的に埋戻した土層の可能性がある。下層は、灰色シルト混じり粘土で、上層の各細別層と比較して粘性が強い点が特徴である。下層には粘土ブロックが含まれておらず、層相の観察から、井戸機能時の滯水状況を示す土層と考えられる。なお、SE207の完掘後、遺構の底部では多くの湧水が認められた。この点と土層の堆積状況を考慮すると、SE207が井戸であることを首肯できる。

SE207からは、肥前系磁器、肥前系陶器、産地不明の陶器が出土した（142～144）。

c 性格不明遺構

SX245（図26） 調査区中央北側に位置する遺構である。SX245は擾乱等で破壊されており、遺存状態は不良である。そのため、SX245の詳細及び性格は不明である。

SX245からは、時期不明の瓦片が出土した。

d 溝

SD201（図30・32、図版5） 調査区中央付近に南北方向に掘削された溝である。溝の北半は直線的、南半は一部が屈曲する。SD201は、SD242とSE207と重複関係を有し、SD201はSD242より古く、SE207よりも新しい遺構であることが判明した。

SD201の検出長は約9.3m、幅は広い箇所で約0.3m、狭い箇所で約0.1mである。埋土は2

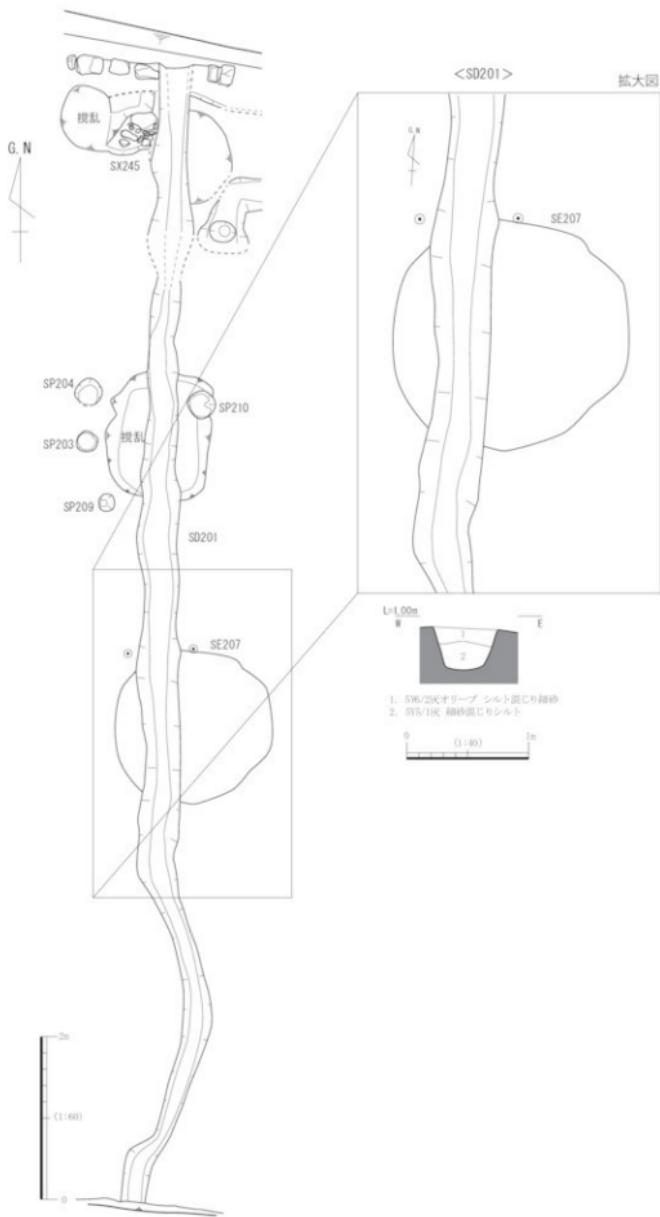


図30 第2造横面 SD201 平面図・断面図 (1:60・1:40)

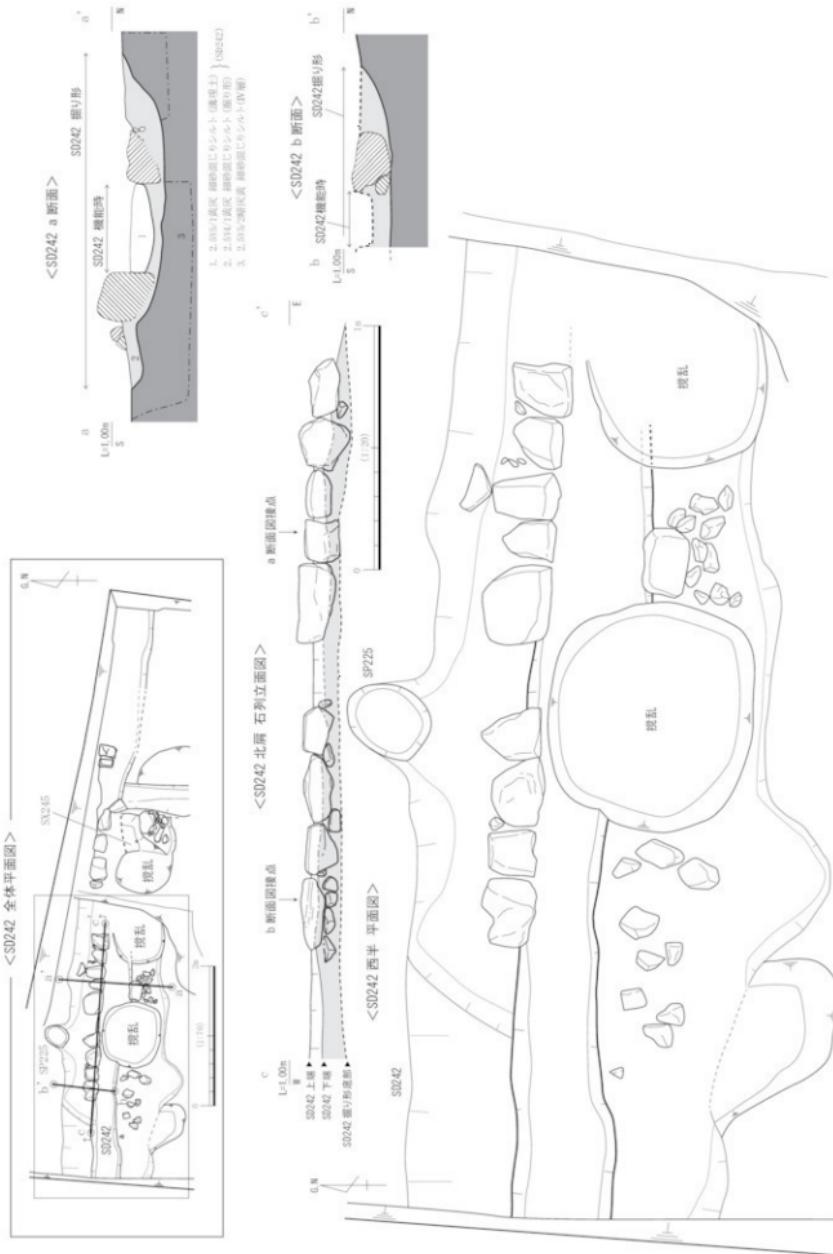


图 31 第2道構面 SD242 平面图、断面图、立面图 (1/40・1/20)

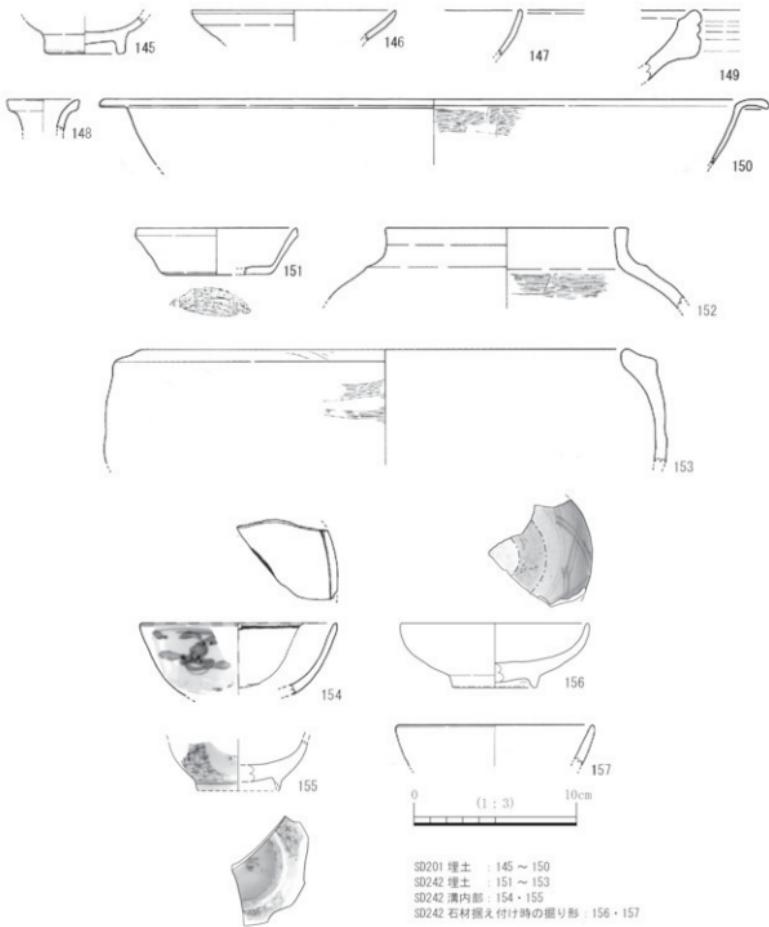


図32 第2遺構面 溝 出土遺物（土器1/3）

層に細別でき、上層は灰色オリーブシルト混じり細砂、下層は灰色細砂混じりシルトである。層相の観察から、SD201に流水の痕跡は認められなかった。なお、他の遺構との関連は、SD201とSD242は直交するような配置をとるが、SD242の埋土除去後にSD201を確認したことから、双方は前後差のある遺構と言える。

SD201からは、肥前系磁器、肥前系陶器、備前系陶器、土師質土器、瓦が出土した（145～150）。肥前系磁器の占める割合は少なく、肥前系陶器と備前系陶器が遺物組成の主体を占める。

SD240（図26） 調査区北東側に位置する溝である。SD240は、主に東西方向に掘削されており、溝の西侧でおよそ90°の角度で南へ屈曲する。ただし、それよりも南側で溝の続きを検出すすることはできなかった。SD240の幅は約0.3m、深さは約0.1mで、埋土は黄灰色細砂混じりシル

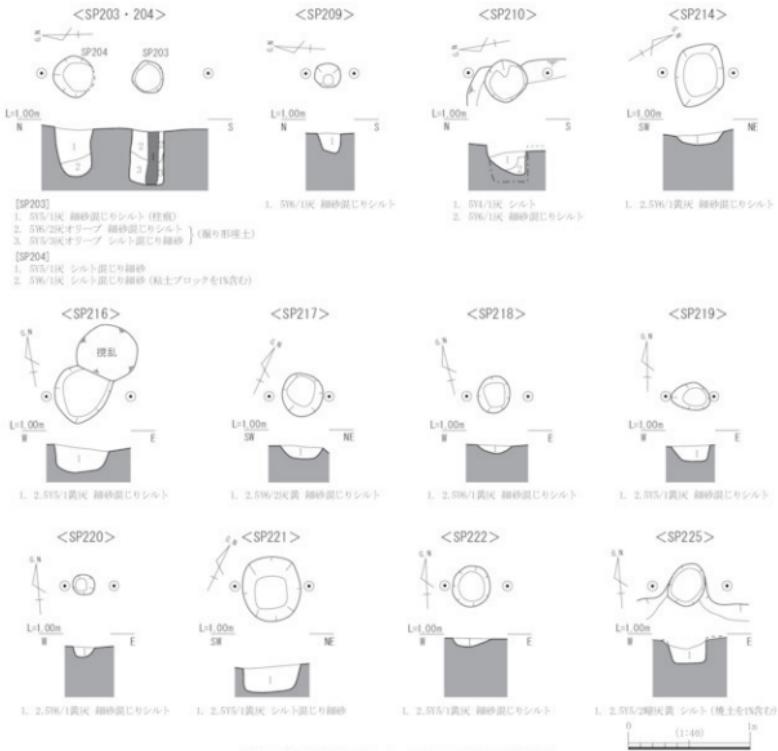


図33 第2造横面 ピット 平面図・断面図 (1/40)

トの単層である。土層の観察から、SD240 に流水の痕跡は認められなかった。SD240 の位置から、敷地内の区画を意図して掘削された溝の可能性が考えられる。

SD240 からは、時期不明の瓦片が出土した。

SD242 (図 31・32、図版 6・7) 調査区北側に位置する東西溝である。SD242 は SD201・SX245 と重複関係を有する。明確に前後関係を認識できたのが SD201 で、SD242 の埋土を掘削したのちに、SD201 を検出できたことから、SD242 は SD201 よりも後に形成されたことが分かる。

SD242 は、溝の北側の肩に石材を据え付けた様子を観察できることから、石組みの溝と言える。断割り調査の結果、石材を設置するための掘り形が存在することが明らかとなった。断面での観察では、石材を据え付けるための掘り形の幅は、明瞭に計測できた箇所で約 1.4 m、深さは最深部で約 0.2 m、埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。石材の据え付けに伴う掘り形の平面形は、調査区東側では検出できなかったが、西側では東西方向に溝状を呈することを確認した。平面・断面の観察からは、石材を据え付けるための掘り形を溝状に掘削したのち、掘り形に土を入れながら同時に石材を据え付ける作業工程が推定できる。石材の設置後、石材の内側に幅約 0.4 m、深さ約 0.1 m の溝を東西方向に掘削する。溝として機能した段階の遺構の規模は、検出長約 8.1 m、幅約 0.4 m、深さ約 0.1 m で、ほぼ座標に沿うように東西方向に掘削されている。溝の埋土は黄

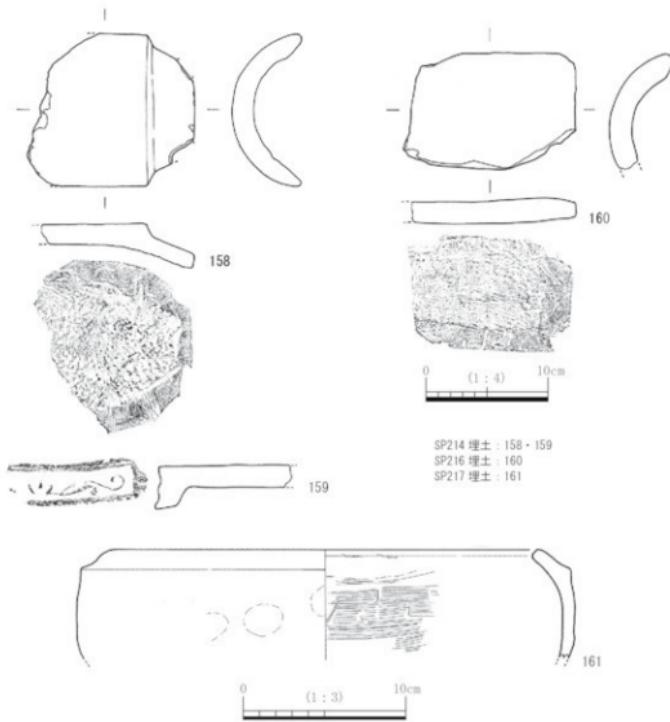


図34 第2遺構面 ピット 出土遺物（土器1/3、瓦1/4）

灰色細砂混じりシルトで、流水のあった痕跡は確認できなかった。溝の北肩に据えられた石材は、溝の内側に向けて9つの石材が配置される。石材の底部には、小礫を複数個置いており、その状況から石材を水平に設置するための小礫と考えられる。溝の南肩は、同様の機能を持つ可能性のある石材が1石のみ確認できたが、他に石材は認められなかった。石組み溝であることから、雨落ち溝になる可能性が考えられる。

SD242からは、中国産磁器、肥前系磁器、肥前系陶器、土師質土器が出土した（151～157）。151は土師器皿A III、153は土師質土器鍋で、いずれも古相を示す資料と考えられる。また、中国産磁碗（154）は漳州窯系と考えられる。肥前系磁器碗（155）も見られるが、出土量はわずかである。

e ピット（図33・34）

調査区内で13基のピットを検出した（SP203・204・209・210・214・216～222・225）。これらのピットは、第1遺構面と同様に建物に復元できるような平面分布ではなく、複数箇所に複数基が偏って分布する傾向が読み取れる。ピットの掘り形は円形・楕円形・隅丸方形など多様で、直径が0.2～0.5m程度、深さは0.1～0.5m程度である。これらのピットのうち、SP203のみ柱痕が認められたが、他に同様のピットは存在しなかった。



図35 第3造構面 平面図 (1/100)

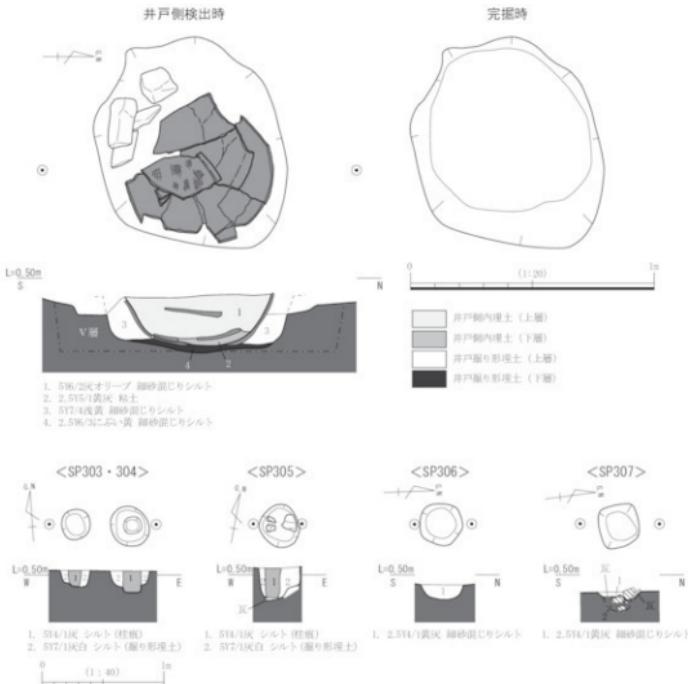


図36 第3遺構面 井戸・ピット 平面図・断面図 (1/40)

検出したピットのうち、SP214から丸瓦（158）、軒平瓦（159）、SP216から丸瓦（160）、SP217から土師質土器鍋（161）が出土した。

(6) 第3遺構面の遺構・遺物（図35）

第3遺構面で検出したのは、土坑、井戸、ピットである。

a 土坑

SK308（図35） 調査区北西側に位置する遺構である。SK308の続きは調査区の外側に続くため、遺構の全容は不明である。調査した箇所の遺構の形状から、土坑と判断した。SK308の南北長は1.0 m以上、東西長は0.6 m以上である。湧水のため、断面の記録は作成できなかつた。SK308から遺物は出土していない。

b 井戸

SE301（図36・37、図版8・9） 調査区南西側に位置する遺構である。SE301の平面形は梢円形で、

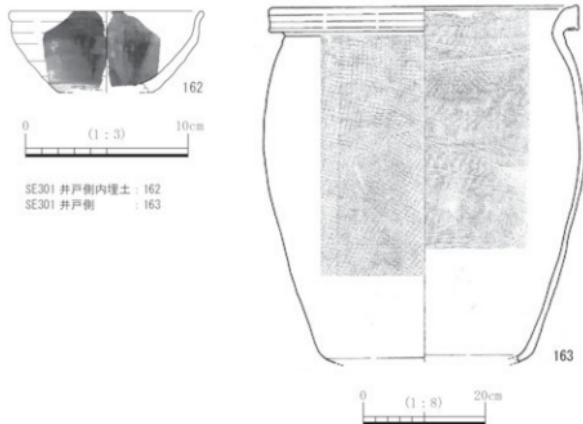


図37 第3道横面 井戸 出土遺物 (土器1/3・1/8)

長軸は約1.9m、短軸は約1.6m、深さは約0.5mである。掘り形内部には、瓦質土器甕を直立させて設置する。瓦質土器甕の設置状況から、SE301は甕を井戸側に使用した井戸と考えられる。埋土は、井戸側内部と掘り形に二大別ができる。井戸側内の埋土は二細別が可能で、上層は灰オリーブ細砂混じりシルト、下層は黄灰色粘土である。このうち、井戸側内埋土下層は、粘性が著しく強いことから、井戸が機能していた段階で堆積した土層と考えられる。一方、井戸掘り形埋土も2層に細別できる。上層が浅黄色細砂混じりシルト、下層がにぶい黄色細砂混じりシルトである。双方の堆積順序を確認すると、下層は井戸側の下位、上層は井戸側の上位に堆積することから、掘り形下層は井戸側設置前の土層、上層は井戸側設置後の土層と判断できる。特に、掘り形下層は、井戸側を据え付ける際に掘り形底部の凹凸を均すための置土の可能性が考えられる。

SE301からは、瀬戸・美濃系陶器、瓦質土器が出土した(162・163)。162は瀬戸・美濃系天目茶碗で、口縁部は内湾したのち、やや外方に開く。163は瓦質土器の大甕で、井戸側として利用する。163の外面は格子叩きが明瞭に残り、内面は横位ハケを残す。甕の形態の特徴として、体部から底部にかけて明瞭に内側に屈曲する点が挙げられる。形状等から、亀山系の甕と考えられる。

c ピット (図36)

調査区内で5基のピットを検出した(SP303～307)。これらのピットの配置から、掘立柱建物を復元することはできなかった。ピットの掘り形は円形・隅丸方形などで、直径が0.2～0.4m程度、深さは0.1～0.3m程度である。これらのピットのうち、SP303・304・305の3基は柱痕が認められた。柱痕の太さは0.1m程度である。検出したピットのうち、図化できなかつたがSP305から瓦片、SP306から土師質土器皿片・瓦片が出土した。

第4章 総括

第1節 検出遺構と出土遺物について(図38)

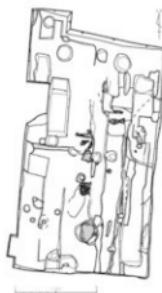
今回の発掘調査によって、近世の遺構面を合計3面確認した。出土遺物が少量の遺構もあり、遺構の時期比定は困難を極めたが、各遺構面の遺構を相対的に評価した上で、各期の様相を概観する。

最上位に位置する第1遺構面では、18世紀後半から19世紀後半にかけての遺構を検出した。この遺構面で検出した遺構は、複数の遺構に重複関係が認められること、遺物に時間幅があることから、同一面ながらやや時間幅のある遺構を確認したと考えられる。検出した遺構は、土坑・井戸・ピット・溝・性格不明遺構で、下位の遺構面と比較して、遺構密度が高いことを指摘できる。ただし、調査区が狭小であり、かつピットが不規則な配置であることから、居住遺構を復元することは困難であった。

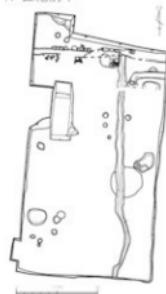
第2遺構面では、土坑・井戸・ピット・溝を検出したが、遺構そのものの数は少ない。これらの遺構から出土した遺物より、17世紀前半に相当する時期の遺構と捉えられる。とりわけ、第2遺構面の土地利用を復元する上で、SD201とSD242の2条の溝は重要な遺構と考えられる。前者は南北方向、後者は東西方向に開削された溝であるが、双方には重複関係が認められ、SD201が古くSD242が新しいことが明らかとなった。双方の溝は、ほぼ座標に沿って東西・南北方向に開削されている。特に、SD242は石組みの溝であり、雨落ち溝の役割を果たした可能性が考えられる。そのように考えると、絵図等から調査地の北側は街路になることが分かるため、SD242の北側に土地を区画する塀などの遮蔽施設が存在した可能性が考えられる。いずれにしても、第2遺構面で初めて区画を意図したと見られる溝を開削した点は、本調査地における土地利用の変遷をトレースする上で、看過できない事象と言える。溝で区画された内側の空間については、遺構分布に偏りが見られる点を指摘できるが、具体的な土地利用の復元は、第1遺構面と同様に困難である。本調査地は、後述する絵図との比較から、隣接する土地との境界付近に位置すると推定できる。そのような位置にあるがゆえに、本調査地は建物など、宅地の主要な構成要素となる遺構が希薄な地点であった可能性が推定できる。

第3遺構面では、土坑・井戸・ピットを合計7基検出した。出土遺物から、17世紀初頭に位置付けられる遺構と考えられる。検出した遺構は、調査区西側のみに偏って分布するため、建物を復元することはできなかった。注目できるのは、亀山系と考えられる瓦質土器甕を井戸側に転用した井戸(SE301)

18世紀後半～19世紀後半



17世紀前半



17世紀初頭

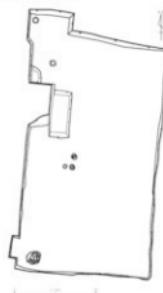


図38 遺構変遷図 (1/300)

を確認した点である。遺構の規模から、SE301は宅地内に存在した井戸と考えられる。SE301は、当該期における宅地内の空間利用を断片的に示す、重要な遺構と位置付けられる。

さて、各遺構面を大まかに整理したが、遺物についての傾向も確認する。遺物の出土量が最も多いのが、第1遺構面の遺構等から出土した高松城跡（西の丸地区）の様相編年案の「様相7・8」の遺物である。これに対して、コンニャク印判を使用した肥前系磁器や仏飯器など多様な器種構成からなる様相5前後の遺物はほとんど見られない。すなわち、本調査地では17世紀後半から18世紀前半の遺物が極めて少ない点を指摘できる。遺物の空白期間は、本調査地における重要な知見の一つになる可能性がある。

上記のとおり整理できるが、今回の調査成果の要点をまとめると以下のとおりとなる。

- 1) 少なくとも近世以前の生活面が3面存在する。また、2層の人為的な整地層が存在することから、少なくとも2回の宅地利用の変更を伴う造成が行われた点を推定できる。
- 2) 第3遺構面は17世紀初頭、第2遺構面は17世紀前半、第1遺構面は18世紀後半から19世紀後半、以上の時期が推定できる。
- 3) いずれの遺構面でも建物の復元はできなかつたが、井戸や廐棄土坑など日常生活と密接な関係を持つ遺構や、区画を意図したと見られる溝を確認したことから、各遺構面ともに宅地として利用されたことが推定できる。
- 4) 17世紀前半に初めて宅地の区画を意図したと見られる溝が開削されることから、宅地内の空間利用に変化が生じた可能性が推定できる。
- 5) 17世紀後半から18世紀前半の遺物がほとんど出土しておらず、日常雑器の数量的な断絶期間を経たのち、18世紀後半から遺物・遺構の数が増加する傾向を指摘できる。

このように、今回の調査では、複数時期の生活面の様子を断片的に知ることができた。また、各時期の遺物量の多寡が存在するという知見は、当地における重要な情報となりうることも推定できた。

第2節 絵図と調査成果の比較

(1) 絵図から読み取る調査地の土地利用の変遷

高松城下は、城下町を描いた多数の絵図が残されていることで知られる。近年、絵図と考古学的な調査成果の比較も進み、城下町の具体的な様子が復元されつつある。本節では、絵図と調査成果との整合性について検討する。

さて、調査地は、絵図によっては人物名の記載が見られるほど、土地利用の変遷を絵図から推定することが可能な地点と言える。さらに、調査地が高松城の旧大手の前に位置することから、階層の高い人物の居住地であったことも推定できる。まず、絵図から読み取ることができる当地の状況について、古い製作年代が推定される絵図から順に整理する。なお、絵図の中での調査地点の比定は、調査地南西側の路地に特徴的なクランクが現存しており、絵図でもこのクランクが描かれているものが存在することから、この部分を手がかりとした。

調査地点の居住者の人物名が記載された古い

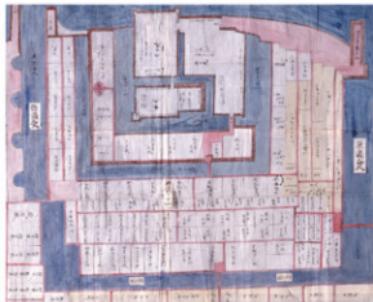


図39 許岐国高松城園寛永十七年生駒家封地没収
大洲藩主加藤泰興預当時 (高松市歴史資料館蔵)

時期の絵図として、松平入封前の状況を示すと考えられる『讃岐高松城図寛永十七年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興預当時』(図39)（寛永17年、1640年）が挙げられる。本絵図では、調査地点に「入谷助市」と記載されている。また、17世紀中頃の製作年代が推定される『高松城下図屏風』では、調査地の東側に土壘状の構造物が描かれている。調査地東側は、他の絵図も含めた判読から町屋域と考えられるため、その境界に何らかの構造物が設けられていた可能性を推定できる。

次に、松平入封後の状況を概観する。『讃岐高松之城図』(図40)（寛永19～寛文10年、1642～1670年）には、「谷平右衛門」との記載がある。『日本輿地図讃州高松地図』(正徳・享保年間、1711～1736年)、及び『高松地図』(元文5年、1740年)では、「谷藏人」との人物名が記載される。なお、『日本輿地図讃州高松地図』では、「谷藏人 元亨(ヤシキ)」と記載されている点は、当該期の宅地利用の状況を検討する場合に留意する必要のある記載と考えられる。一方、『享保年間高松城下図』(図41)（享保年間、1718～1762年）では、調査地は「御用屋敷」と記載されており、人物名の記載は見られない。

『寛政元年己酉年五月高松之図』(寛政元年、1789年)では、「大久保黄之助」というこれまでとは異なる人物名が記載される。『高松市街古図』(図42)（文化年間、1804～1818年）では「前御屋敷」と記載される。本絵図では、町人城であった東側の区画も武家屋敷城の中に組み込まれたように描かれている点は注目される。その後、『讃岐高松城下図絵』(図43)（天保13～弘化3年、1842～1846年）では「染心院様」、『安政四末年高松之図』(安政4年、1857年)では「染信院様」と記載される。

絵図から調査地とその周辺の情報を抽出したが、これらの情報を整理すると下記のとおりとなる。

- 1) 調査地は、近世を通じて主に武家屋敷及び上流階級の宅地として利用された。また、調査地は東側にある町屋域との境界

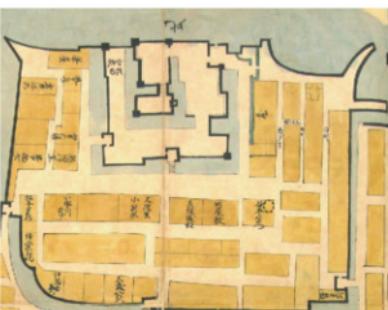


図40 讃岐高松之城図（高松市歴史資料館蔵）

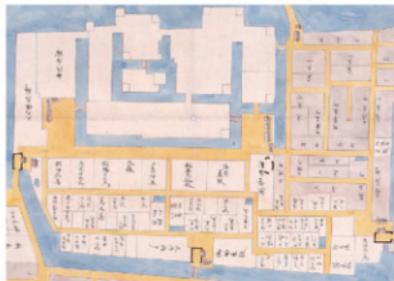


図41 享保年間高松城下図（高松市歴史資料館蔵）



図42 高松市街古図（高松市歴史資料館蔵）



図43 讃岐高松城下絵図（高松市歴史資料館蔵）

- 付近に位置すると考えられる。
- 2) 多くの絵図で人物名が記載されており、調査地における各時期の居住者の推定が可能と考えられる。
 - 3) 19世紀前半の絵図から、当該期に東側の町屋域の一部を武家屋敷域に取り込んだことが推定される。
 - 4) 本調査地の変遷は、生駒期後半と考えられる17世紀中頃には「入谷助市」、松平入封後の状況を示す17世紀中頃から後半にかけては「谷平右衛門」、18世紀前半は「谷藏人」、18世紀末頃は「大久保黄之助」、19世紀中頃以降には「染信院様」、以上の変遷をたどる。

ここで④)に関連して、各絵図に見られた居住者について、主な人物の概要を井下氏¹⁾と柴田氏²⁾の整理に従って概観する。

谷平右衛門は、元々保科家の家臣であった。その系譜をひく谷藏人は、三代藩主賴豊の代まで大老を務めた人物である。藏人は諸般の理由で、18世紀初めに賴豊より御暇を命ぜられる。大久保黄之助は、天明年間の高松藩3000石の大老で、天保9(1838)年没。黄之助の父は第5代藩主賴恭の六男賴裕で、後に大久保家を継ぐこととなる。染信院は第9代藩主賴惣の生母で、安政6(1859)年に没し、仏生山法然寺に埋葬される³⁾。以上のとおり、本調査地は近世段階において、高松藩の要職に就いた人物、ないしは藩主の生母など重要な人物の居住地として利用されていたことが絵図などの資料から推定できる。

さて、居住者に変化が見られる時期には、土地利用の上で何らかの変化が生じる可能性がある。そのような視点で見ると、入谷家から谷家に居住者が変わったと見られる17世紀中頃、大久保家に居住者が変わったと見られる18世紀後半、染信院に居住者が変わったと見られる19世紀中頃、絵図からは17世紀中頃、18世紀後半、19世紀中頃の3時期に変化を見出すことができる。

(2) 絵図と調査成果の比較

ここでは、絵図の情報と今回の調査成果を比較する。調査で確認したのは、合計3面の遺構面である。絵図と関連する調査成果の要点として挙げられるのが、①18世紀前半の遺物が希薄、②18世紀前半以前の遺構は、整地層を介在して異なる上位の遺構面(第2面)に存在する、③18世紀後半から遺物量が増加し、かつ遺構数も増えることから積極的な土地利用の様子が窺える、この3点である。以上を換言すると、18世紀後半以降の遺構が形成される前に、遺物の数量から見る断絶期間が存在することと、宅地内の大規模な造成が行われた可能性が推定できるのである。

①・②の要因について、18世紀前半の遺物量の希薄さが、絵図に見る谷藏人の御暇と関連する可能性も推定できる。これは、谷藏人の宅地としての利用が低調となつた期間は日常雑器の使用量が減少することが推定でき、それが調査で確認した18世紀前半の遺物量減と連動する可能性を考えられる。他方、自然災害等も本事象の外的要因となりうる。自然災害としては、宝永4(1707)年と安政元(1853)年に、高松城下に大きな被害をもたらした地震が発生している。また、享保3(1718)年に発生した、いわゆる「高松大火」は、調査地周辺に多くの被害をもたらしたと考えられることから、外的要因の一つと言える。ただし、高松大火に関する具体的な知見を、今回の調査地で確認することはできなかった。周辺の調査では、調査地南東側で行われた高松城跡(丸の内地区)の調査において、17世紀後葉から18世紀前葉に帰属する第2遺構面から、18世紀後葉から19世紀後葉に帰属する第3遺構面の形成に至る過程で、高松大火という外的要因が契機となって造成を行った可能性が指摘されている⁴⁾。数10cmの厚さの整地を一定の範囲で行うこということは、相応の規模を有する土木工事と考えられる。その点からも、高松大火は、再造成を行う必要性を生じさせるに十分な外的要因だったと考えられる。

これらの要因以外に、調査地の宅地における位置も考慮しなければならないだろう。絵図から

は、調査地が宅地の北東隅付近に位置することが推定できるため、土地利用の低調な位置に調査地が位置した可能性も否定できない。以上のように、①・②は、前述した2つの要因以外に、単純に宅地内における空間利用の差という可能性も想定できる。この点は、周辺で調査が行われる機会があれば、検証する必要がある課題と言える。

③については、18世紀後半に大久保黄之助、その後に染信院と居住者が変化することによって、宅地としての利用状況が活発化したことに起因する可能性がある。

以上のように、絵図と調査成果の比較から、近世の土地利用の変遷を把握することができた。近世における調査地は、主に上級武士等の屋敷として利用されたことが絵図から把握できた。調査区が狭小であるため、検出した遺構から各時期の宅地内の土地利用の実態までは明らかにすることはできなかった。しかし、18世紀以降の考古学的成果と絵図等で推定する変遷が調和的に理解できた点は、本調査地における大きな成果と言える。

引用文献

- (1) 井下香皇 2002『讃岐松平藩士由緒録』高松大学出版会
- (2) 舟田勤夫 1980『高松城下武家屋敷住人跡 上』五星文庫
- (3) 古野徳久 (編) 2015『高松藩主松平家墓所調査報告書』香川県立ミュージアム
- (4) 池見 渉 (編) 2015『丸の内共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡（丸の内地区）』
高松市教育委員会

遺物觀察表

表1 土器・土製品 観察表(1)

土器・土製品 質察表(2)

質文 番号	基盤 番号	種別	器物名	产地	外観・内面		基盤 番号	地質 (地層・時代)	地質 (地層・時代)	地質 (地層・時代)	地質 (地層・時代)
					口径 (cm)	高さ (cm)					
36 91	5822	縦口	縦口	肥前	(9.1) 4.6	0.8	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
37 92	5822	縦口	縦口	肥前	(11.9) 5.2	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
80 78	5822	縦口	縦口	肥前	—	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
41 89	5822	縦口	縦口	肥前	(10.7) 4.8	0.5 (7)	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
62 90	5822	縦口	縦口	肥前	—	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
63 92	5822	縦口	縦口	肥前	(10.9) 5.1	5.4	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
44 71	5822	上横口	横口	肥前	(6.6) 0.6	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
65 100	5822	上横口	横口	肥前	(11.6) 4.7	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
86 96	5822	上横口	横口	肥前	(11.4) 4.9	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
67 93	5822	上横口	横口	肥前	6.6	0.6	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
55 73	5822 上横	横口	横口	肥前	(10.0) 5.2	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
53 79	5822 上横	横口	横口	肥前	(10.2) 2.6	5.7	直筒	直筒	直筒	直筒	直筒
94 88	5822 上横	横口	横口	肥前	(10.7) 2.9	0.6	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
95 94	5822 上横	横口	横口	肥前	—	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
96 76	5822 上横	横口	横口	肥前	(10.6) 4.7	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
37 79	5822 上横	横口	横口	肥前	(17.2) 12.7	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
58 81	5822 上横	横口	横口	肥前	—	(2.9) 4.4	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒
59 75	5822 上横	横口	横口	肥前	(18.6) 7.3	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
60 73	5822 上横	横口	横口	肥前	(17.3) 5.0	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
61 83	5822 上横	横口	横口	肥前	(15.1) 5.1	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
73 102	5822 上横	横口	横口	肥前	(17.0) 5.5	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
63 101	5822 上横	横口	横口	肥前	—	(1.9) 4.3 (3.0)	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒
64 108	5822 上横	横口	横口	肥前	—	(2.1) 4.0	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒
65 111	5822 上横	横口	横口	肥前	(11.0) 5.0	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
66 110	5822 上横	横口	横口	肥前	(10.6) 5.2	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
67 109-1	5822 上横	横口	横口	肥前	(11.0) 5.0	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
68 104	5822 上横	横口	横口	肥前	(11.2) 5.2	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
69 105	5822 上横	横口	横口	肥前	(14.2) 4.0	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
70 101	5822 上横	横口	横口	肥前	(16.0) 5.0	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒
71 103	5822 上横	横口	横口	肥前	(16.0) 5.0	—	直筒・切妻	直筒・切妻	直筒	直筒	直筒

土器・土製品 鋸解表(3)

號文 番号	開拓 場所	遺構	縁形	器種名	直径 (cm)	基盤 高さ (cm)	口径 高さ (cm)	外縁 高さ (cm)	内縁・基盤		削除 直線 長さ (cm)	削除 直線 幅さ (cm)	(油± 灰± 白± 黒± 青± 緑± 褐色 等の 内色調)	(油± 灰± 白± 黒± 青± 緑± 褐色 等の 外色調)	削除 直線 長さ (cm)	削除 直線 幅さ (cm)	備考
									内縁 直線 長さ (cm)	基盤 直線 幅さ (cm)							
72 1092 72 1092 下部	周辺	円筒	不規則 な形状	深鉢	11.9	—	11.9	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無
73 1092 73 1092 上部	上部斜面 上部	尖底	直線	深鉢	11.6	—	11.6	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無
74 1112 74 1112 下部	上部斜面 上部	尖底	直線	深鉢	11.6	—	11.6	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	有 少ない 縫合
75 105 75 1052 下部上部	周辺	円筒	直線	深鉢	11.4	1.95	2.2	1.95	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
76 845 76 8452 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.5	—	11.5	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
77 86 77 8622 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.6	—	11.6	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
78 87 78 8722 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.5	—	11.5	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
80 100 80 1002 上部	上部斜面 上部	平底	直線	深鉢	11.6	—	11.6	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
81 178 81 1782 基盤上部	上部斜面 上部	平底	直線	深鉢	11.5	—	11.5	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
82 128 82 1282 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.5	—	11.5	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
83 108 83 1082 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.6	—	11.6	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
84 127 84 1272 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.5	—	11.5	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
85 138 85 1382 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.5	—	11.5	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
86 139 86 1392 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.5	—	11.5	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
87 131 87 1312 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.3	—	11.3	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
88 142 88 1422 小杯	深鉢	小杯	直線	深鉢	11.6	1.65	1.65	1.65	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
89 147 89 1472 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.6	1.65	1.65	1.65	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
90 100 90 1002 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.0	0.71	6.0	0.71	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
91 161 91 1612 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.4	—	11.4	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
92 162 92 1622 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.4	—	11.4	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
93 178 93 1782 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.6	—	11.6	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
94 138 94 1382 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.6	—	11.6	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
95 179 95 1792 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	12.6	—	12.6	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
96 917 96 9172 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.6	—	11.6	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
97 917 97 9172 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	11.6	—	11.6	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好
98 50 98 502 基盤上部	周辺	直線	直線	深鉢	12.6	—	12.6	—	—	—	7.37±7.47	6.07±6.17	7.37±7.47 油±白± 黒± 青± 緑± 褐色± 褐色等	7.37±7.47	6.07±6.17	無	良好

土器・土製品 銅版表(4)

番号	商品名	基盤	種別	器物名	場所	口径 (cm)	底径 (cm)	高度 (cm)	内面	外縁		外縁・底面		地味 (底付・内付)	地味 (底付・外付)	地味 (底付・上付)	地味	縁	縁
										外縁	底付	内付	底付						
100 65	S017	陶器	盤	煎茶・茶道具	西	3.3	[16.6]	—	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良	無	
100 69	S017	陶器	瓶	高	煎茶	3.3	[16.6]	—	[16.6]ナラ・方今日	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
101 96	S017	陶器	圓筒	煎茶	4.9	[26.8]	[5.8]	[13.8]	高さ 底付	白	[16.6]	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
102 95	S017	陶器	圓筒	煎茶	—	[4.1]	[28.0]	[6.8]	底付・通水	白	[16.6]	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
103 94	S017	陶器	瓶	高	4.9	—	3.4	—	通水	白	[16.6]	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
104 53	S017	土器	直筒	五	—	[13.5]	[13.5]	—	ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良	無	
106 54	S018	陶器	瓶	煎茶	[11.4]	2.9	[15.1]	—	[15.1]ナラ・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良	無	
107 55	S018	土器	直筒	五	—	[10.7]	[21.1]	6.0	[10.7]ナラ・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	有	外縁打継	
108 56	S019	土器	直筒	五	—	[10.9]	[21.0]	6.0	[10.9]ナラ・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
111 69	S119-2	陶器	瓶	高	4.9	—	[16.4]	4.2	通水	白	[16.6]	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
112 51	S210	土器	直筒	五	—	[15.1]	[23.5]	7.8	[15.1]ナラ・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
113 52	S210	土器	直筒	五	—	[15.1]	[23.5]	7.8	[15.1]ナラ・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
114 6	S03	陶器	瓶	高	肥前	—	[16.0]	[16.0]	[16.0]ナラ・通水	白	[16.6]	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
115 3	S03	陶器	盖	煎茶	煎茶	[11.8]	[5.3]	—	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良	有	
116 4	S03	上部質	上部質	通水	通水	[52.0]	[24.2]	—	[52.0]ナラ	通水	[52.0]ナラ	通水	[52.0]ナラ	通水	[52.0]ナラ	通水	有	外縁打継	
117 7	S03	底部質	底部質	通水	通水	[11.9]	[5.7]	—	[11.9]ナラ・通水	通水	[11.9]ナラ・通水	通水	[11.9]ナラ・通水	通水	[11.9]ナラ・通水	通水	有	外縁打継	
118 8	S06	陶器	直筒	五	肥前	—	[16.4]	—	[16.6]ナラ・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
119 9	S07	陶器	瓶	肥前	—	[16.4]	4.7	—	通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
120 16	S09	陶器	蓋	肥前	—	[16.9]	3.9	—	通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
121 13	S09	陶器	瓶	肥前	—	[16.9]	5.0	[14.5]	通水・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
122 17	S08	陶器	蓋	肥前	[11.6]	[19.3]	[16.3]	[19.3]	白・白・白・白・白	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
123 12	S08	陶器	瓶	肥前	—	[12.5]	3.8	—	通水・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
124 11	S08	陶器	瓶	肥前	—	[16.2]	[18.2]	[16.2]	通水・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
125 29	S08	陶器	蓋	通水	—	[16.9]	3.6	[13.7]	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
126 14	S08	陶器	瓶	五重	—	[16.9]	[16.9]	—	通水・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
127 18	S08	陶器	蓋	通水	通水	[16.8]	[8.8]	—	通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
128 21	S08	陶器	瓶	五重	—	[16.4]	[18.9]	[16.4]	通水・通水・通水・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
129 10	S08	陶器	瓶	五重	—	[16.1]	[16.9]	—	[16.9]ナラ・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
130 15	S08	陶器	蓋	通水	—	[16.9]	2.1	—	通水・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無	
131 22	S08	陶器	瓶	五重	—	[16.2]	—	—	通水・テナ少・底ナ少	ナラ	[16.6]ナラ	ナラ	[16.6]ナラ	ナラ	[16.6]ナラ	ナラ	良好	無	
132 19	S08	陶器	蓋	通水	—	6.8	3.6	5.8	通水	ナラ・通水	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	[16.6]ナラ	白	良好	無

土器・土製品 観察表(5)

表2 瓦 観察表

編文 番号	出土場所 番号	種別	重量 (g)		形状 (cm)	施土 含水率など	焼成 度	色調	測定		備考		
			全長	幅					凸	凹			
20	30	軒瓦	[7.2]	11.2	1.4	[3.7]	11.3	1.4	良	青 青石色	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉		
31	67	軒瓦	[13.2]	[10.3]	1.5	[6.5]	[12.3]	1.5	良好	青	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉		
35	69	丸瓦	27.0	13.8	1.4	—	—	—	良好	青	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉		
36	66	丸瓦	[16.0]	[16.0]	2.2	—	—	—	良	青	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉		
37	68	3021	軒瓦	[5.9]	[11.8]	1.5	3.75	[11.8]	1.2	良	青 青石色含む	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉	
46	98	3022	軒瓦	—	—	—	[6.1]	[12.4]	1.35	良	青	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉	
49	99	3022	丸瓦	[11.1]	12.8	1.8	—	—	—	良	青	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉	
50	72	3022	上屋	軒瓦	[6.4]	[12.2]	2.0	4.2	[12.2]	2.1	良	青	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉
51	78	3022	上屋	軒瓦	[7.6]	[10.2]	1.6	3.4	[10.2]	2.1	良	青	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉
79	96	3022	屋根瓦	軒瓦	5.1	13.0	1.5	6.8	13.0	1.75	良	青 青石色含む	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉
96	110	3034	軒瓦	—	—	—	[5.6]	[5.6]	1.5	不良	青 青石色含む	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉	
105	31	3047	軒瓦	—	[10.8]	12.6	1.4	12.6	12.6	1.7	良好	青	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉
110	59	3119	屋根瓦	軒瓦	[11.1]	13.8	2.2	13.1	13.8	1.9	良好	青 青石色含む	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉
133	26	3098	軒瓦	[5.9]	12.2	1.5	1.6	12.2	1.35	良	青 青石色含む	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉	
137	119	30302	軒瓦	[2.1]	[14.0]	—	[8.5]	[14.0]	1.4	良	青	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉	
138	149	30323	丸瓦	[11.5]	[17.4]	1.5	—	—	—	良好	青 青石色含む	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉	
139	151	30313	軒瓦	[11.6]	[11.8]	1.8	3.4	[11.8]	1.7	良	青 青石色含む	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉	
136	67	30214	丸瓦	[13.7]	12.6	1.7	—	—	—	良好	青	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉	
139	150	30214	丸瓦	[12.0]	21.3	1.55	—	—	—	良好	青 青石色含む	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉	
140	154	30216	丸瓦	[13.9]	—	2.0	—	—	—	良	青 青石色含む	タテガタのナゲ 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉 瓦面に少少粉	

表3 金属製品 鉢底表

報文 実測 番号	出土遺構 層位	種類	名称	法量			備考
4 1	III層	鉄製品	キセル (吸首)	4.5cm	1.05cm	1.05cm	
5 157	III層	金属製品	錢貨 (寛永通宝(折))	2.4mm	2.4mm	1mm	
28 36	SK11	金属製品	不明	1.5cm	2.1cm	0.15cm	
109 57	SX19 上層	金属製品	キセル (吸口)	5.5cm	1.4cm	0.1cm	

写真図版



写真7 SD242 調査風景（南西から）

写 真 図 版 目 次

写真図版1

- 1 調査区東壁断面 (南西から)
- 2 調査区東壁 基本層序 (西から)
- 3 調査区南壁 基本層序 (北から)

写真図版2

- 1 調査区東側 第1遺構面 全景 (北西から)
- 2 SK11 断面 (南から)
- 3 SK21 断面 (西から)
- 4 SK22底部 遺物出土状況 (北西から)
- 5 SK39 断面 (北西から)
- 6 SK39底部 骨出土状況 (北西から)
- 7 SK46 断面 (南から)

写真図版3

- 1 SE17 断面 (南東から)
- 2 SX18 断面 (北西から)
- 3 SX19 断面 (西から)
- 4 SX19底部 遺構検出状況 (南西から)
- 5 SX19-2・3 断面 (南から)
- 6 SX20 断面 (東から)
- 7 SX23 断割り断面 (東から)
- 8 SD8 断面 (南から)

写真図版4

- 1 調査区東側 第2遺構面 全景 (北西から)
- 2 SK202 断面 (北東から)
- 3 SK213 断面 (南東から)
- 4 SK215 断面 (東から)
- 5 SK223 断面 (南から)
- 6 SE207 断面 (西から)
- 7 SE207 完掘状況 (西から)

写真図版5

- 1 SD201 全景 (南から)
- 2 SD201 全景 (北から)
- 3 SD201 断面 (南から)

写真図版6

- 1 SD242 検出状況 (東から)
- 2 SD242 溝掘削状況 (東から)
- 3 SD242 完掘状況 (東から)

写真図版7

- 1 SD242溝内 断面 (東から)
- 2 SD242掘り形 断面 (北東から)
- 3 SD242 溝内埋土除去後 (東から)
- 4 SD242 溝内埋土除去後 (南東から)
- 5 SD242 溝内埋土除去後 (南から)
- 6 SD242 石材下部 断割り状況 (南から)
- 7 SD242 石材下部 断割り状況 (南西から)
- 8 SD242 石材下部 断割り状況 (南から)

写真図版8

- 1 SE301 半裁状況 (東から)
- 2 SE301 断面 (北東から)
- 3 SE301 完掘状況 (東から)

写真図版9

- 1 SE301井戸側 検出状況 (東から)
- 2 SE301井戸側 検出状況 (西から)

写真図版10

出土遺物1

写真図版11

出土遺物2

写真図版12

出土遺物3



1 調査区東壁断面（南西から）



2 調査区東壁 基本層序（西から）



3 調査区南壁 基本層序（北から）



1 調査区東側 第1遺構面 全景（北西から）



2 SK11 断面（南から）



3 SK21 断面（西から）



4 SK22 底部 遺物出土状況（北西から）



5 SK39 断面（北西から）



6 SK39 底部 骨出土状況（北西から）



7 SK46 断面（南から）



1 SE17 断面（南東から）



2 SX18 断面（北西から）



3 SX19 断面（西から）



4 SX19 底部 遺構検出状況（南西から）



5 SX19-2・3 断面（南から）



6 SX20 断面（東から）



7 SX23 断割り断面（東から）



8 SD 8 断面（南から）



1 調査区東側 第2遺構面 全景（北西から）



2 SK202 断面（北東から）



3 SK213 断面（南東から）



4 SK215 断面（東から）



5 SK223 断面（南から）



6 SE207 断面（西から）



7 SE207 完掘状況（西から）

1 SD201 全景（南から）



2 SD201 全景（北から）



3 SD201 断面（南から）





1 SD242 梢出状況（東から）



2 SD242 溝掘削状況（東から）



3 SD242 完掘状況（東から）



1 SD242 溝内 断面（東から）



2 SD242 挖り形 断面（北東から）



3 SD242 溝内埋土除去後（東から）



4 SD242 溝内埋土除去後（南東から）



5 SD242 溝内埋土除去後（南から）



6 SD242 石材下部 断割り状況（南から）



7 SD242 石材下部 断割り状況（南西から）



8 SD242 石材下部 断割り状況（南から）



1 SE301 半裁状況（東から）



2 SE301 断面（北東から）



3 SE301 完掘状況（東から）



1 SE301 井戸側 検出状況(東から)



2 SE301 井戸側 検出状況(西から)

写真図版 10



SK10



18

17

19

16

15

18

17

16

15

SK11



28

SK11



22

25

24

26

27

23



21

SK22 下層



66
68
71

SK22 下層



74
70
72
73
65
67
64
63
69

SK22 底部直上



77

75



78

76

79



76



出土遺物 1

SK22 上層



SK22 底部直上



SX39



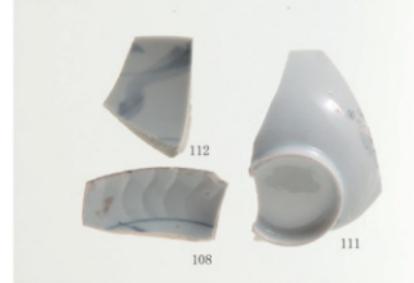
SX18



SE17



SX19・20



出土遺物 2

写 SX19 床面直上

真
圖
版
12



110

SX19 上層



109

SE207 上・下層



143

144

145

142

148

149

SD242



157

154

156

155

152

151

153

SE301



163

出土遺物 3

報 告 書 抄 錄

丸の内町共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

高松城跡（丸の内地区）

平成 28 年 3 月 30 日

編 集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号
発 行 有限会社 都市企画設計
高松市教育委員会
印 刷 有限会社 中央ファイリング